初等科國語 三 文部省

K1
M
1002

初等科國語

二

文部省

もくろく

一　朝の海べ……四
二　潮干狩……六
三　日本武尊……十四
四　君が代少年……十三
五　靖國神社……十
六　光明皇后……十二
七　苗代のころ……三十六
八　地鎭祭……三十九
九　笛の名人……四十五
十　機械……四十八
十一　出航……五十一
十二　千早城……五十七
十三　錦の御旗……六十一

十二　千早城……五十七
十三　錦の御旗……六十一
十四　國旗掲揚臺……六十五
十五　夏……七十四
十六　兵營だより……七十七
十七　油蟬の一生……八十五
十八　とびこみ臺……九十
十九　母馬子馬……九十四
二十　東郷元帥……九十七
二十一　くものす……百二
二十二　夕日……百六
二十三　秋の空……百八
二十四　濱田彌兵衛……百九

十一　機械……四十八
出航……五十一

一　朝の海べ

朝の潮風あびながら、
弟と二人、海べをかける。
しめつた砂をけりながら、
波うちぎはを、どんどんかけ
ろ。

明かるい海だ、どこまでも。
地平線は銀色で、
空と海とがとけあつて、
明かるい海だ、どこまでも。

明かるい海だ、どこまでも。

「一、ぼくらは石を投げてみた、

二の「三。」で投げてみた。

弟の石が海に落ち、

つづいてぼくのが海に落ち。

かもめが五六羽とんで來て、

波にゆられて浮かんでる。

水にもぐつてひよいと出て、

ひよいと浮かんでまたもぐる。

風に向かつてぼくたちは、
兩手をあげて息を吸ふ。
朝の海べはもう春で、
みんなは、
樂しい、新しい。

二

海岸は、一面に潮が引いてゐて、もう大勢の人たちが、潮干狩をしてゐました。

先生は、私たち四年生の人員をお調べになつてから、次の

先生は、私たち四年生の人員をお調べになつてみました。

やうにおつしやいました。

「これから潮干狩をするのですが、いつものやうに、四人づつ一組になつて、仲よく貝をお取りなさい。　さうして、海には、どんな生きものがゐるかを、よく氣をつけて見るやうになさい。」

勇さんと、正男さんと、花子さんと、私と、四人が一組になつて、ほり始めました。小さな熊手で砂をかくと、かはるものがあります。三センチぐらゐのあさりとさて、ほり始めました。小さな熊手で砂をかくと、かはるものがあります。三センチぐらゐのあさりでした。あさりは、こんな淺いところに、もぐつてゐるのかなと思ひ

ながら、むちゆうになつてほつて行きました。おもしろいほど、たくさん出て来ました。

ほつたあとに水がしみ出て、まはりの砂が、少しうつくつうつくつれて行くので、手ですくつて、かい出しました。すると、小石のやうなものが、手にさはりました。砂を拂つてよく見ると、大きなはまぐりでした。はまぐりは、あさりよりも、少し深いところにゐることがわかりました。

「おや、こんな貝が出た。」

と、正男さんが、六七センチもある細長





と、正男さんが、六七センチもある細長い貝を、みんなの前へ出しました。みんなは、

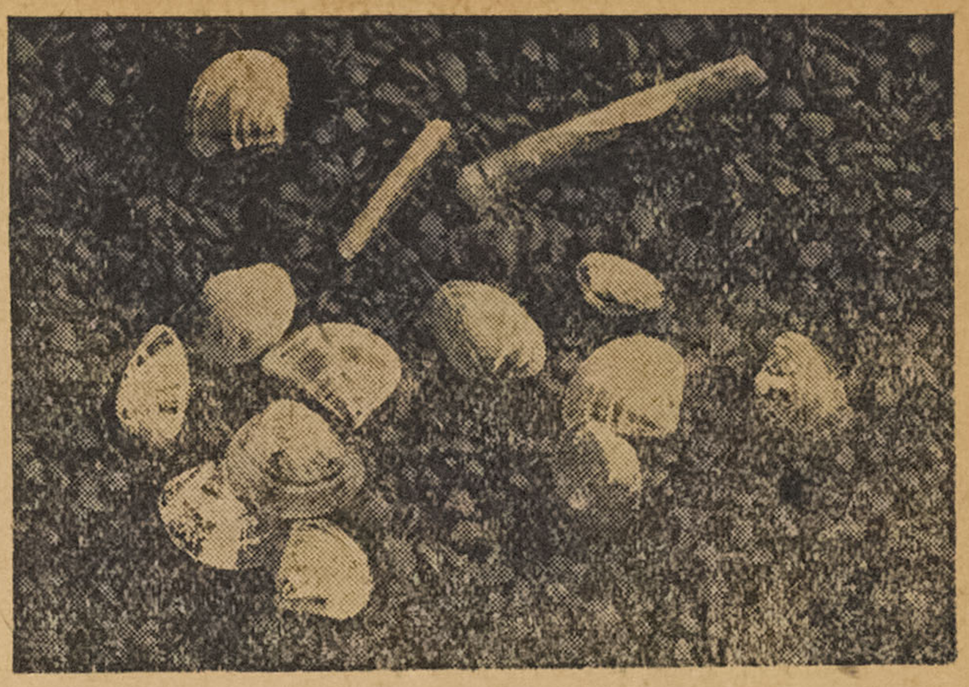
「何といふ貝だらう」。

といつて、いろいろ、貝の名前を思ひ出してみましたが、だれにもわかりませんでした。

「先生に聞きに行きませう」。

と、花子さんは、その貝を持つて、先生のところへ走つて行きました。先生は、





「これは、いいものを見つけましたね。まてがひといふ貝ですよ。持つて帰つて、みんなで標本を作つてごらんなさい。」

とおつしやいました。

私たちは、波うちぎはを、ぱちやぱちや歩きながら、子牛がねてゐるやうな岩の方へ行きました。

ひやりと、足にさはるものがありました。拾つて見ると、

ぬらぬらした、茶色な海藻でした。

「おや、春枝さんは、わかめを拾ひましたね。」

と、花子さんがいひました。

私は、これがあの、おわんの中に

と、花子さんは、わかめを拾ひました。

「おや、春枝さんは、わかめがいひましたね。」

と、花子さんがいひました。　私は、これがあの、おわんの中に浮いてゐるわかめかと思ひました。

「ぼく、こんなおもしろいものを見つけたよ。」

とうれしさうに笑ひながら、勇さんが走つて来ました。　手には、葉の根もとにまるい玉のやうな袋のついてゐる、茶色な海藻を持つてゐました。

「おい、きみたち、このまるい玉を、みんなで持つてみました。

いかい。

と、勇さんがいつたので、私たちは、みんな指先に力を入れました。「パチン」。と音がして、まるい玉がはじけました。

「おもしろいなあ。もう一ぺんやらう。」

と、みんなで、「パチン、パチン。」と

先生がごらんになつて、

「おもしろいことをしてゐますね。

その海藻は、何だか知つてゐますか。」

とおたづねになりましたが、だれも知りません。

「ほんだはらといふものです。こんぶといつしよに、お正月のおかざりにするでせう。」

と、先生がおつしやいました。

私たちは、先生といつしよに、岩のそばへ行きました。岩

の間のすきとほつた水の中で、きれいな、六七センチばかり

の間のすきとほつた水の中で、きれいな、六七センチばかりの魚が、からだをくねらせて、岩に生えた海藻の間を上手に泳いでゐました。べらといふ魚ださうです。

何とかしてべらを取りたいと思ひました。

ひしますと、先生は、たもで勢よく、さつとおすくひになりました。べらが、たもの中で、きれいな、六七センチばかりの魚が、からだをくねらせて、岩に生えた海藻の間を上手に泳いでゐました。べらといふ魚ださうです。

何とかしてべらを取りたいと思ひました。

ひしますと、先生は、たもで勢よく、さつとおすくひになりました。べらが、たもの中で、ぴちぴちとはねましした。

海岸で、畫のおべんたうをたべました。

そのころから、潮がだんだんさして來て、私たちの歸る時には、あのあさりをほつたところも、海藻を拾つた波うちぎはも、もうすつかり、海の水でかくされてゐました。

三

日本武尊（やまとたけるのみこと）

川上建（かはかみたける）

熊襲（くまそ）のかしら川上たけるは、力のあるにまかせて、四方に勢を張り、のちには、朝廷の仰せにも従ひませんでした。

「西の國で、自分より強い者はない。」と思ふと、たけるは、だんだん増長して來ました。「ひとつ、りつぱな宮殿を建て、たくさんの兵士に守らせて、大いばつてやらう。」と考へました。

いよいよ、家もできあがつたので、ある日、お祝ひをするこ

とになりました。

となりました。

その日は、朝から、大勢の人が出はいりしました。

集つて来ました。

者はいふまでもなく、手傳ひのために、たくさんの男や女が

働いてゐるうちに、一人の美しい少女がまじつて、かひがひしく

その少女も座敷へ出て、

酒をつぎました。

酒もりが始まると、

だんだん夜がふけて来ました。

客も、しだいに歸つて行きました。

ろよろしながら、奥の間へ行かうとしました。

たけるは、もうねようといふので、酒によつてよ

いよいよ、家もできあがつたので、ある日、お祝ひをすること



にまし「あつ。」とさけんで、たけるは倒れをします。

「くやしとこの時でした。今まで、やさしくお給仕をしてゐた少女は、すつと立ちあがつて、

「たける、待て。」

たけるといふが早いか、ふところにかくしてゐた劍を抜いて、たけるの胸を突きました。

ふり返ると、少女は、いかにも尊いゐげんに滿ちて、立つて

をります。

「お待ちください。　これはずぶるぶると身ぶるひをして、たけるは、思はずぶるぶると身ぶるひをして、

はない。

と、苦しい息の下からたづねました。

「自分は女ではない。　天皇の御子、やまとをぐな。

れ多くも、朝廷の仰せに従ひまつらぬによつて、汝を討

との勅をかうむり、ここへ来たのである」。

「なるほど、さういふお方でいらつしやいましたか。　西の國では、私より強い者はないので、たけると申してをります。

した。

失禮ながら、ただ今、お名をさしあげませう。　日本

でいちばんお強いあなたは、日本武皇子（やまとたけるのみこ）と仰せられますやうに。」

といひ終つて、たけるは息が絶えました。

景行（けいかう）天皇の御子、やまとをぐなの皇子（みこ）は、御年十六、かうして、ただお一人で、熊襲をおほろぼしになりましたが、これからのち、日本武尊と申しあげることになりました。

草薙劍（くさなぎのつるぎ）

熊襲を討つて、都へお歸りになつた日本武尊は、そののち、東の國のわるい者を平げよといふ勅をお受けになつて御出發になりました。

途中、まづ伊勢（せ）の皇大神宮に參つて、御武運をお祈りにな

途中、まづ伊勢の皇大神宮に參つて、御武運をお祈りになりました。

倭姫命は、尊が二度の大任をおうけになつたのを、勇ましくも、また、いたはしくお思ひになつて、大切な天叢雲劍を尊にお授けになりました。

また、一つの小さな袋をお渡しになつて、

「もしものことがあつたら、忘れずに、この袋の口をおあけなさい。」

とおつしやいました。

尊は、東へと進んで、駿河の國にお着きになりました。

この國にゐたわる者のかしらは、かねて、尊の御勇武を聞き傳へて、知つてゐましたので、一通りではとてもかつ勝てない、だまし討ちにするほかはないと思ひました。そこで、尊をうやうやしく迎へて、いろいろおもてなしをしながら申しました。

「この國の野原には、大きな鹿がたくさんをります。おなぐさみに、狩をなさつてはいかがでございます。」

尊は、「それはおもしろからう」。とおつしやつて、野原へお出になりました。身の丈にもあまる草を分けて、だんだんと奥へはいつていらつしやいました。すると、かねてから、こ



と、尊はしばらく考へていらつしやいましたが、ふと御心に浮かんだのは、御をば倭姫命のおことばです。　急いで袋の口をおあけになると、中に火打石がありました。

尊は、すぐに、おさとりになりました。

手早くあたりの草をなぎ拂ひ、火打石で火をきつて、その草におつけになりました。火は、急に方向をかへて、向かふへと、もえ移つて行きました。

まつて來た火は、急に方向をかへて、向かふへと、もえ移つて行きました。

あわてたのは、わる者どもです。火に追はれて、逃げようとするまもなく、かたはしから燒きたてられ、燒き殺されてしまひました。

あやふい御いのちをお助りになつた尊は、生き殘つたわる者どもを平げて、なほも東へお進みになりました。

二十二

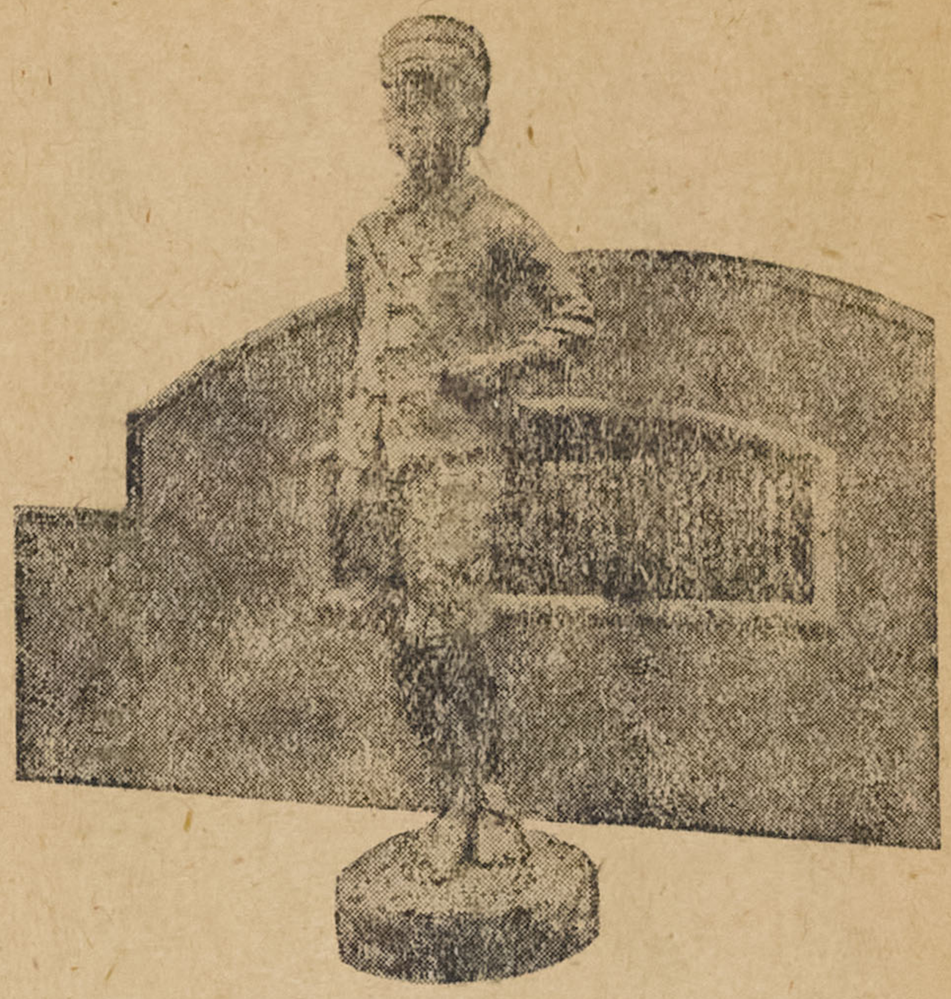
この時から、この御劒を、草薙劒と申しあげることになり

この時から、この御劒を、草薙劒と申しあげることになりました。熱田神宮におまつりしてあるのが、この御劒であります。

四　君が代少年

昭和十年四月二十一日の朝、臺灣で大きな地震がありました。

公學校の三年生であつた徳坤といふ少年は、けさも目がさめると、顔を洗つてから、うやうやしく神だなに向かつて、拜禮をしました。神だなには、皇大神宮の大麻がおまつり



して、あるのです。

なるそれから、まもなく朝の御飯におもた父を呼びに行きました。

家を出て少し行つた時、「ゴー」。

と恐しい音がして、地面も、またりの家も、ぐらぐらと動きました。

「地震だ。」と、少年は思ひました。そのとたん、少年のからだの上へ、そばの建物の土角がくづれて来ました。土角は、粘土を固めて作つた煉瓦のやうなものです。

といふのは、父や、近所の人たちがかけつけた時、少年は、頭と足に大けがをして、道ばたに倒れてゐましたから。

それでも父の姿を見ると、少年は、自分の苦しいことは一口も、はなさないで、

がをして、道ばたに倒れてゐました。それでも父の姿を見ると、少年は、自分の苦しいことは一口もいはないで、「おかあさんは、大丈夫でせうね」。といひました。

少年の傷は思つたよりも重く、その日の午後、かりに作られた治療所で手術を受けました。

中にも、少年は、決して臺灣語を口に出しませんでした。日本人は國語を使ふものだと、學校で教へられてから、どんなに不自由でも、國語を使ひ通して來たのです。

德坤は、しきりに學校のことをいひました。先生の名を

呼びました。　また、友だちの名を呼びました。

ちやうどそのころ、學校には、何百人といふけが人が運ばれて、先生たちは、目がまはるほどいそがしかつたのですが、德坤が重いけがをしたと聞かれて、代りあつて見まひに來られました。

德坤は、涙を流して喜びました。

「先生、ぼく、早くなほつて、學校へ行きたいのです」。

と、德坤はいひました。

「さうだ。早く元氣になつて、學校へ出るのがよい」。

と、先生もはげますやうにいはれましたが、しかし、この重い傷ではどうなるであらうかと、先生は、德坤がいさうでたまりませんでした。

「さうだ。早く元氣になつて學校へ出るのだ。」

と、先生もはげますやうにいはれましたが、しかし、この重い傷ではどうなるであらうかと、先生は、德坤がたまりませんでした。

少年は、あくる日の晝ごろ、父と、母と、受持の先生にまもられて、遠くの町にある醫院へ送られて行きました。

その夜、つかれて、うとうとしてゐた德坤が、夜明近くなつて、ぱつちりと目をあけました。

「おとうさん、先生はいらつしやらないの。もう一度、先生におあひしたいなあ。」

といひました。　さうして、そばにゐた父に、

と感じたのかも知れません。　これつきり、自分は、遠いところへ行くのだ

それからしばらくして、少年はいひました。

「おとうさん、ぼく、君が代を歌ひます」。

少年は、ちよつと目をつぶつて、何か考へてゐるやうでしたが、やがて息を深く吸つて、静かに歌ひだしました。

きみがよは
ちよに
やちよに
しみこむやうに聞えました。

徳坤が心をこめて歌ふ聲は、同じ病室にゐる人たちの心に、

さざれ

しみこむやうに聞えました。

さざれ　いしの

小さいながら、はつきりと歌はつづいて行きます。あちこちに、すすり泣きの聲が起りました。

いはほとなりて

こけのむすまで

終りに近くなると、聲はだんだん細くなりました。でも、最後まで、りつぱに歌ひ通しました。

君が代を歌ひ終つた徳坤は、その朝、父と、母と、人々の涙にみまもられながら、やすらかに長い眠りにつきました。

五

靖國（やすくに）神社

春は九段のお社に、
櫻が咲いてをりました。

日本一の大鳥居、
かねの鳥居がありました。

とびらは金の御紋章、
御門を通つて行きました。

かしは手うてばこうこうと、
心の底まで聲ひびきます。

櫻の花の遺族章、
女の人も見えました。

遊就館（いうしうくわん）の入口に、
人が並んでをりました。

と
ひ
に
御門を通つて行きました。

六　光明皇后

聖武天皇の皇后を、光明皇后と申しあげます。

そのころ、都は奈良にありました。

りにかがやく奈良の都には、赤くぬつた宮殿や、お寺のお堂が、あちらこちらに見えてゐました。

お建てになつた、せやく院といふ病院が立つてゐました。

せやく院には、大勢の病人がおしかけて、病氣をみてもらつたり、藥をいただいたりしてゐました。

「この子はひどい目の病で、もうものが見えなくなりかと心配しましたが、毎日、かうして藥をいただいてゐるおかげで、



と涙をこぼして、ありがたがるおばあさんもありました。

光明皇后は、ときどき、この病院へおいでになつて、病人たちをお見まひになりました。

つたり
「この
かと
おかげで、たいそうよくなりました。」
と、うれしさうにいふ母親もありました。
「私は、おなかの病氣で、長い間寢てゐましたが、こゝろは、おかげでだいぶよくなりました。」
のお恵みでございます。」
しました。
くなりました。
のお恵みでございます。」

ることさへありました。

このやうに、しんせつにしていただくので、どんな重い病氣でも、きつとなほるといふはさが、いつのまにか日本中にひろがりました。

光明皇后は、手足の痛む病人や、傷の痛みがなほらないやうな者のために、藥の風呂を作つておやりになりました。この風呂には、いつもあたたかい藥の湯が、あふれてゐました。

「皇后樣が、御自分で、病人のほんたうにしんせつにしていただいてゐれば、皇后樣におせわをなさるといふことだが、

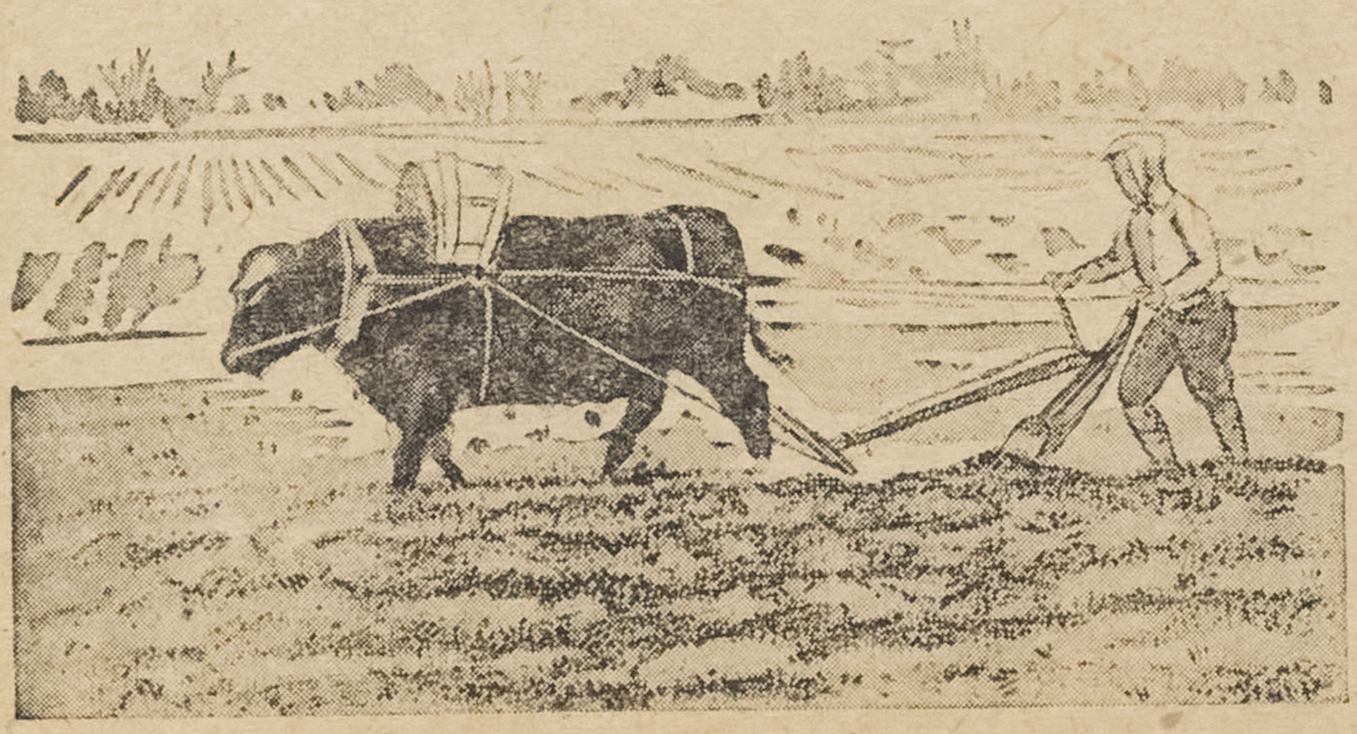
「こんなに

「こんなにしんせつにしていてみれば、皇后様にお
せわをしていただくのと、同じことではないか。」
「まつたくその通りだ。うはさに聞けば、皇后様は、千人の
病人のせわをなさるといふ大願を、お立てになつたさう
だ。ほんたうに、もつたいないことだ。」
このやうな話をしながら、薬の風呂にはいる病人が、いつも
絶えませんでした。
光明皇后は、この薬の風呂へもおいでになつて、一人一人
をおせわなさいました。さうして、千人めの病人のおせわ
をなさつた時、急に病人のからだから光がさし出て、あたり

が金色にかがやき渡つたといふことです。

七　苗代のころ

春の少し暖い晩、「くく、くく」と、蛙の鳴く聲がしたんぼの
そのころから、晝間は、廣い苗代の仕事が始ります。
一部で、もうつくりと引いて行くから
黒い牛が、ゆつくりと引いて行くからには、ほり返された新しい
すきのあとには、ほり返された新しい
土が、暖い日光に照らされます。



土がほり返され、くれ打ちがすむと、田に水がなみなみと

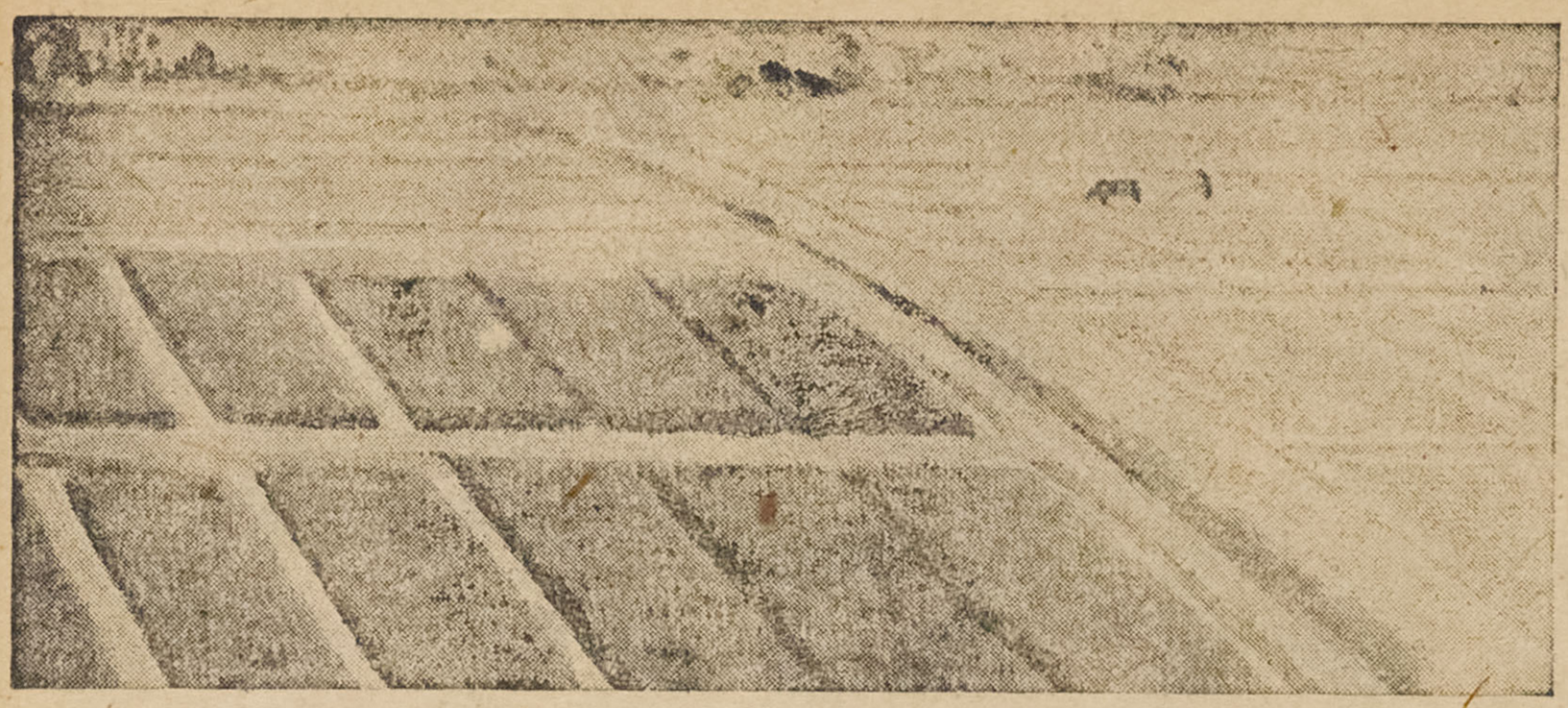
土がほり返され、くれ打ちがすむと、田に水が張られます。今度は、牛がまぐはを引いて、泥水の中を、行つたり来たりします。かうして、田の土は、だんこまかく耕されて行きます。

夜、遠くの田で鳴く蛙の聲が、「ころころ、ころころ、ころころ。」と、にぎやかに聞え始めます。

種まきが十日あまりたつたころ、浅いセンチか三センチぐらゐの、若々しいみどりの苗が出そろつて行くのは、見ただけでも氣持のよいものです。ちやうど、たんざく形のみどりの敷物を、きちんと間を置いて、敷き

土が、暖い日光に照らされます。

並べたやうです。



苗が、二十センチぐらゐにのびて、葉先が、朝風にかるくゆれるやうになると、廣いたんぼは、しだいにみどりいろにぎやかになります。そろそろ、汗ばむくらゐ暑い日ざしを受けて、男も、女も、牛も、泥田の中で働きます。ここの田も、あそこの田も、ほり返した土のかたまりの間には、もうひたひたと、水がたたへられてゐます。

蛙のすみかが、かうして、たんぼいつぱい

にひろがるのです。畫間は、働く人や、牛にゐんりよをする

八　地鎭祭

私たちの學校では、新しい講堂が立つことになりました。

にひろがるのです。　晝間は、働く人や、牛にふんりよをするやうに、聲をひそめてゐますが、夕方から夜になると、さも自分たちの世界だといふやうに、さわぎたてます。　家の前も、後も、横も、まるで夕立の降るやうに、蛙の聲でふゐなかの夜も、このころは、雨戸をしめてから、始めてほつとするほどです。

もうまもなく、田植が始ります。



蛙のすみかが、かうして、たんぼいつぱい

今日は、その地鎭祭がありました。

講堂は、東側の教室の後に立ちます。

上の生徒が、そこに集合しました。

校長先生が、地鎭祭といふのは、新しく家が立つ土地の神様に申しあげて、その家を、いつまでも守つていただくやうに、お祭をするだいじな儀式だと、お話なさいました。

敷地の中ほどに、せいの高い竹が四本立ててあつて、それにしめなはが張つてありました。

そこへ神主さんが、三人お見えになりました。

まつ白な着物を着て、えぼしをかぶつて、しやくを持つて、木のくつをはいてゐられました。

のくつをはいてみられました。

「氣をつけ。」

と、山田先生が號令を掛けられると、校長先生が、

「今から、地鎭祭が始ります。」

といはれました。

神主さんは、大麻をふつて、みんなのおはらひをしてくだ
さいました。と聲を高くあげて、神樣のお
いでになる先拂ひをなさいました。

次に、お供へものをいろいろと、白木の机の上に運ばれま
した。お米や、お酒や、お餅や、魚、大根、にんじん、おしまひに、い



ちご。バナナなどを、それぞれ三方にのせて供へられました。

明かるい日光をあびて、祭壇が、美しく、にぎやかに見えました。

神主さんが、のりとを讀まれました。

私たちに、その意味はよくわかりません。

そして、うやうやしく讀まれました。

それから、地面のおはらひをして、うがちぞめがありました。

うがちぞめといふのは、鍬で土をほる儀式であります。

校長先生が、先生がたを代表して、玉ぐしをささげて手まれ

ぞめとい
校長先生が、先生がたを代表して、玉ぐしを
ました。
をあげて拜みました。
次に、高等科の人が、全校の生徒を代表して玉ぐし
終りに、お供へしたものをみんなさげてから、神樣のお歸
りになる先拂ひがとなへられました。
「休め。」
山田先生の聲がしました。三人の神主さんが、靜かに、私た
ちの前を通つて歸られました。
んたうに美しいと思ひました。
その時、あの白い着物が、ほ



うがちぞめがありました。うがち

山田先生が、

「これで、地鎭祭はすみました。今日は、學校として、記念すべきおめでたい日ですから、みんなで元氣よく、校歌を歌ひませう」。

といはれました。

私たちは、聲をそろへて校歌を歌ひました。

このあき地に、講堂がりつぱに立つた時のことを思ひ、新しいその講堂に、全校の先生も、生徒も、いつしよに集つて並んだ時のことを思つて、うれしさでいつぱいになりました。

九　笛の名人

笛の名人用光（もちみつ）は、ある年の夏、土佐（とさ）の國から京都へのぼらうとして、船に乗つた。

船が、ある港にとまつた夜のことであつた。どこからかあやしい船が現れて、用光の船に近づいたと思ふと、恐しい海賊が、どやどやと乗り移つて來て、用光をとり圍んでしまつた。

用光は、逃げようにも逃げられず、戰はうにも武器がなかつた。ただ、自分は樂人で

だ時のことを思つて、うれしさでいつぱいになりました。

あるから、一生の思ひ出に、心殘りなく笛を吹いてから死にたいと思つた。それで、海賊どもに向かつて、

「かうなつては、おまへたちには、とてもかなはないから、私も覺悟をした。私は樂人である。今ここで、命を取られるのだから、この世の別れに、一曲だけ吹かせてもらひたい。さうして、こんなこともあつたと、世の中に傳へてもらひたい。」

といつて、笛を取り出した。

海賊どもは、顏を見合はせて、

「おもしろい。まあ、ひとつ聞かうではないか。」

といつた。



これは、靜かに、名人といはれた自分の最後の曲だと思つて、用光は、靜かに吹き始めた。　曲の進むにつれて、用光の音に、よつたやうに、ただ一心に吹いた。

雲もない空には、月が美しくかがやいてゐた。　笛の音は、高く低く、波を越えてひびいた。　海賊どもは、じつと耳を傾けて聞いた。

日には涙さへ浮かべてゐた。

やがて、曲は終つた。

「だめだ。あの笛を聞いたら、わるいことなんかできなくなつた。」

海賊どもは、そのまま、船をこいで歸つて行つた。

十

機械

工場だ、機械だ。
鐵だよ、音だよ。
どどどん、どどどん。

ピストン、
腕だよ。
あつちへ、こつちへ、
がたとん、がたとん。
車だ。
車輪だ。
ぐるぐる　まはるよ。
ぐるぐる、ぐるぐる。

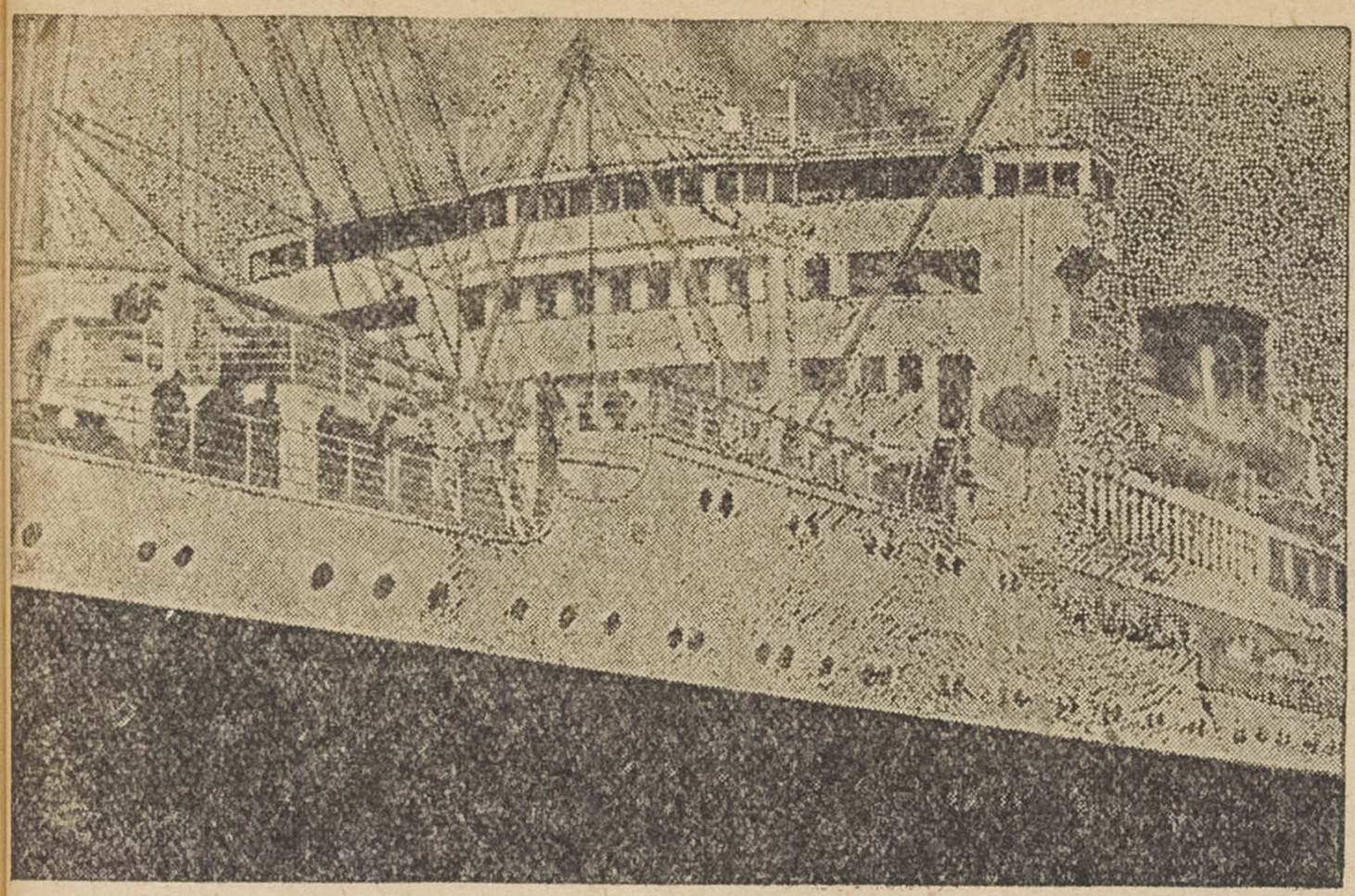
車輪と
車輪に、
皮おび すべるよ。
する する、 するする。

歯車、
歯車、
歯とと歯とかみ合ひ、
ぎりぎり、 ぎりぎり。

動くよ、
音だよ、
鐵だよ、ぐるぐる、
がたごとん、どどどん。

十一　出航

今日、みなさんは、一萬トンの汽船に乗つて、神戸の港をたつのだと考へてください。
みなさんを乗せる船は、今、荷



物を積んでおります。

みなさんといつしよに、あとから、乗客が乗りま す。　船の出る前は、ほんたうに景氣のいいものです。

甲板（かんぱん）に出て並びませう。

上屋（うはや）で、見送りの人が、いつぱい並んでゐます。

みなさんのおとうさんや、おかあさんも、みられるはずですから、あたりを見まはしてゐます。

あ、けたたましいどらの音がします。

まもなく出航です。　見送りの人や、積荷をしてゐた人たちは、これを合圖に、船からおりて行くの

荷をしてゐた人たちは、これを合圖に、船からおりて行くのです。

勇ましい樂隊の音樂が聞えますね。　軍艦マーチが聞えます。愛國行進曲が聞えます。歌はうではありませんか。

いよいよ出航です。　あの、うなるやうに大きな汽笛の音を、お聞きなさい。

さあ、私たちも、いつしよに船は、靜かに岸壁をはなれて行きます。

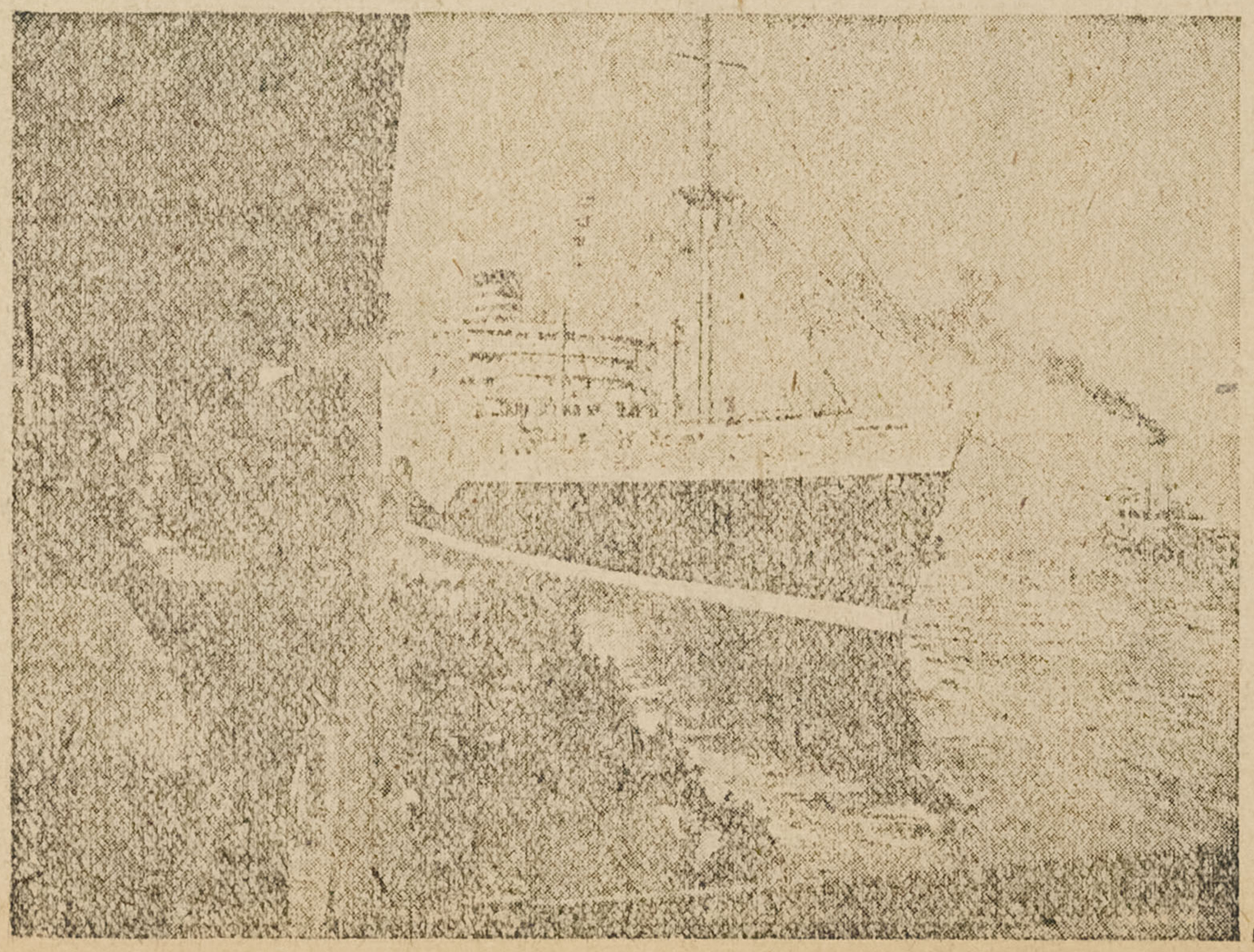
上屋の人たちが、一生けんめいで、ハンケチや帽子を振つてゐます。

さあ、みなさんもお振りなさい。大きな聲で、「お



あはたましいとらの
まもなく出航です。見送りの人や、積

とうさん、行つてまゐります。」
といつておかあさん、行つてまゐります。」
「おかあさん、行つてまゐります。」
船が港を出る時は、途中まで、あ
の小さな汽船に、引つぱられて行
くのです。ちよつと、妙なかつか
うでせう。ちやうど、子犬が、象で
も引つぱつて行くやうですね。
もう、上屋の人は、だれがだれだ
か、はつきりわからなくなりまし
た。それでも、みんな合圖を振つてゐるではありませんか。



ごらんなさい。

だれか女の人が、赤い日がさを

だれか女の人が、赤い日がさを振つてゐるでせう。

か。

いよいよ、小さな汽船からはなれて、私たちの船は、ひとりで走り始めました。さあ、これから、だんだん早くなります

よ。もう、上屋の人は、たいてい帰つて行きました。

右の方に、林のやうに見える起重機――あれは造船所です。今、新しい船を何ざうか、こしらへてゐるのが見えるでせう。

港内には、ずゐぶん船がありますね。　何ざうもあるでせう。

ちよつと数へきれませんね。　大きいのは、満洲や、支那や、南

洋などへ行く船です。　みんな、貨物船のやうです。

さあ、港の口の防波堤へ来ました。　あれを越すと、きれいな瀬戸内海へ出ます。

ごらんなさい。　神戸の市街が、まるで繪のやうに美しく見えるではありませんか。

この船は、あすの朝門司へ着いて、正午ごろ門司を出航します。

それから先は、どこへ行くのでせうか。　みなさんは、どこへ行きたいと思ひますか。

十二　千早城

楠木正成（くすのきまさしげ）がたてこもつた千早城は、けはしい金剛山（こんがうざん）にあるが、まことに小さな城で、軍勢もわづか千人ばかり。これを圍んだ賊は、百萬といふ大軍で、城の附近いつたいは、すつかり人や馬でうづまつた。

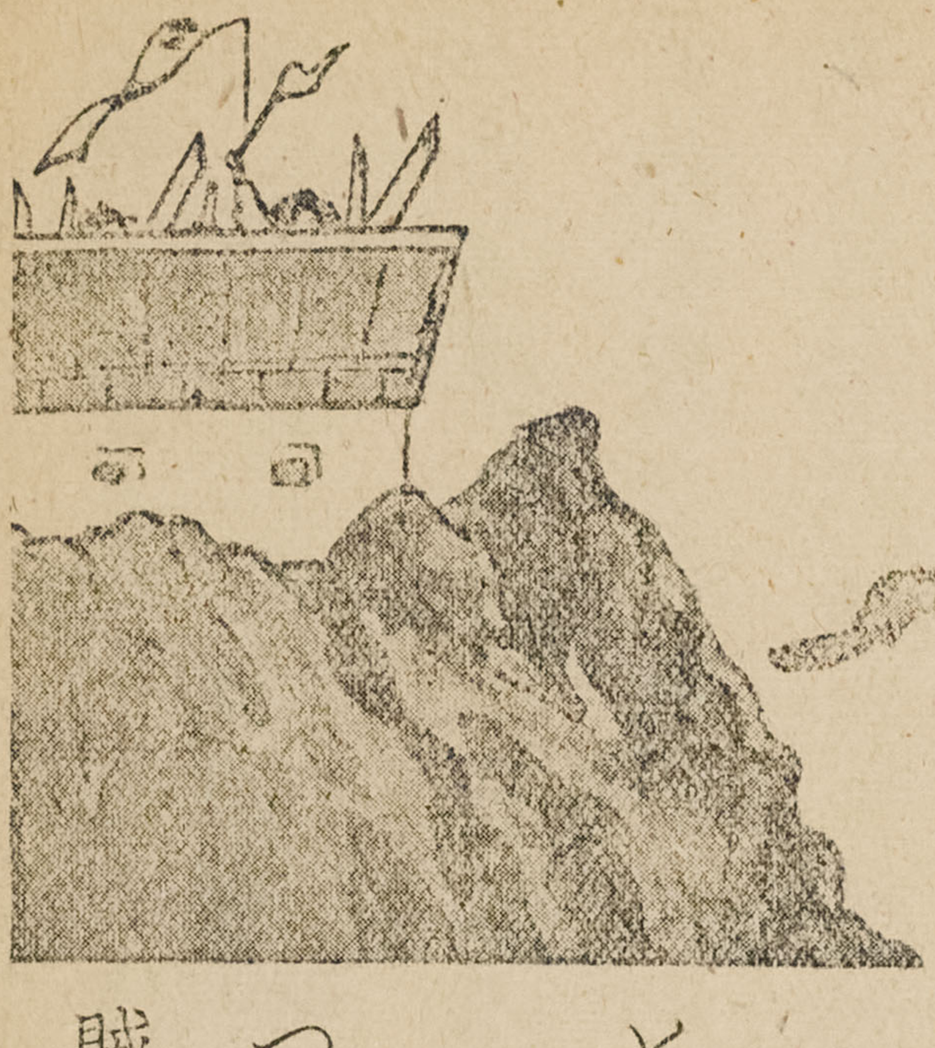
こんな山城一つ、何ほどのことがあるものかと、賊が城の門まで攻めのぼると、城のやぐらから大きな石を投げ落して、賊のさわぐところを、さんざんに射た。賊は、坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

これにこりて、賊は、城の水をたやして、苦しめようとはかつた。

まづ、谷川のほとりに、三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに来られないやうにした。　城中には、十分水の用意がしてあつたので、二日たつても、三日たつても、汲みに来ない。　番兵がゆだんをしてあると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引きあげた。



正成は、この旗を城門に立てて、さんざんに賊のわる口を



正成は、この旗を城門に立てて、さんざんに賊のわる口をいはせた。賊が、これを聞いて、くやしがつて攻め寄せると、正成は、高いがけの上から大木を落させた。

賊が、これをよけようとして、賊のさわぐところを射させて、五千人餘りも殺した。

この上は、ひやうらうう攻めにしようとして、賊は、攻め寄せないことにした。

あくる朝まだ暗いうちに、城中から討つて出て、どつとときの聲をあげた。

賊は、「それ、敵が出た。一人ものがすな。」

と押し寄せた。　城兵はさつと引きあげたが、二三十人だけはふみとどまつた。　賊が、四方からこれをめがけて押し寄せると、城から大きな石を四五十、一度に落したので、また何百人か殺されてみつてみたのは、みんなわら人形であつた。

もうこの上は、何でもかでも攻め落してしまへといふので、賊は、大きなはしごを作り、これを城の前の谷に渡して橋にした。　幅が一丈五尺、長さが二十丈、その上を賊は成は、いつのまに用意しておいたものか、たくさんのたいまつを出して、これに火をつけて、橋の上に投げさせた。　さう

つを出して、これに火をつけて、橋の上に投げさせた。きうして、その上へ油を注がせた。橋は、まん中から焼け切れて、谷底へどうと落ちた。賊は何千人か死傷した。賊が、千早城一つをもてあましてゐると、方々で、官軍がひやうらうの道をふさいだので、賊はすつかり弱つた。百人逃げ二百人逃げして、初めた百萬といつた賊も、しまひには十萬ばかりになつた。それが前後から官軍に討たれて、ちりぢりに逃げてしまつた。

十三　錦の御旗

大塔宮は、北條高時征伐のため、兵をお集めになろうとして、大和の十津川から高野の方へお向かひになつた。

その者は、わづかに九人であつた。

途中には、敵方の者が多かつた。　中にも、芋瀬の荘司は、宮のお通りになることを知つてゐて、道に手下の者を配つてあた。

宮は、どうしても、そこをお通りにならなければならなかつた。

お供の中に、村上彦四郎義光といふ人があた。

この人は、思はず時を過して、宮のおあとの敵のやうすを探るために、ふと見ると、向かふに、日から急ぎ足に道をたどつて来たが、

月を金銀で現した錦の御旗を、おし立ててある者がある。

月を金銀で現した錦の御旗を、おし立ててあるお
義光は、ふしんの眉をひそめた。
である。　もしや、宮の御身に、何
か。　義光は、胸をとどろかした。
急いで近寄ると、芋瀬の荘司が、家来の大男に宮の御旗を
持たせて、さもとくいさうに、何
あつた。
義光は大聲に、
「見れば尊い錦の御旗、どうしてそれを手に入れたのか。」
とつめ寄つた。

荘司は、わうへいに答へた。

「大塔宮を御道筋に待ち受け申し、この御旗を、この荘司が手に入れたのだ。」

義光は、かつと怒つた。

「それはけしからぬ。おそれ多くも宮の御道筋をふさいだ上に、錦の御旗をけがしてまつるとは。」

と叫んで、御旗をうばひ取るが早いか、かの大男をひつつかんで、まりのやうに投げつけた。



國旗掲揚臺

一

國旗掲揚臺のそばに、勇さんと、正男さんと、春枝さんの三人が集つてゐる。三人とも、旗竿の先を見あげてゐる。

早いか、かの大男をひつつかんで、まりのやうに投げつけた。

錦の御旗を肩にかけ、相手をにらみつけながら、おちつきはらつて、その場をたち去つた義光は、やがて宮につて、たてまつつた。

大塔宮は、義光の忠義を心からお喜びになつた。

十四　國旗掲揚臺

と叫んで、御旗をうばひ取るが





勇「ずゐぶん、高いなあ。」

正男「どのくらゐあると思ふ。」

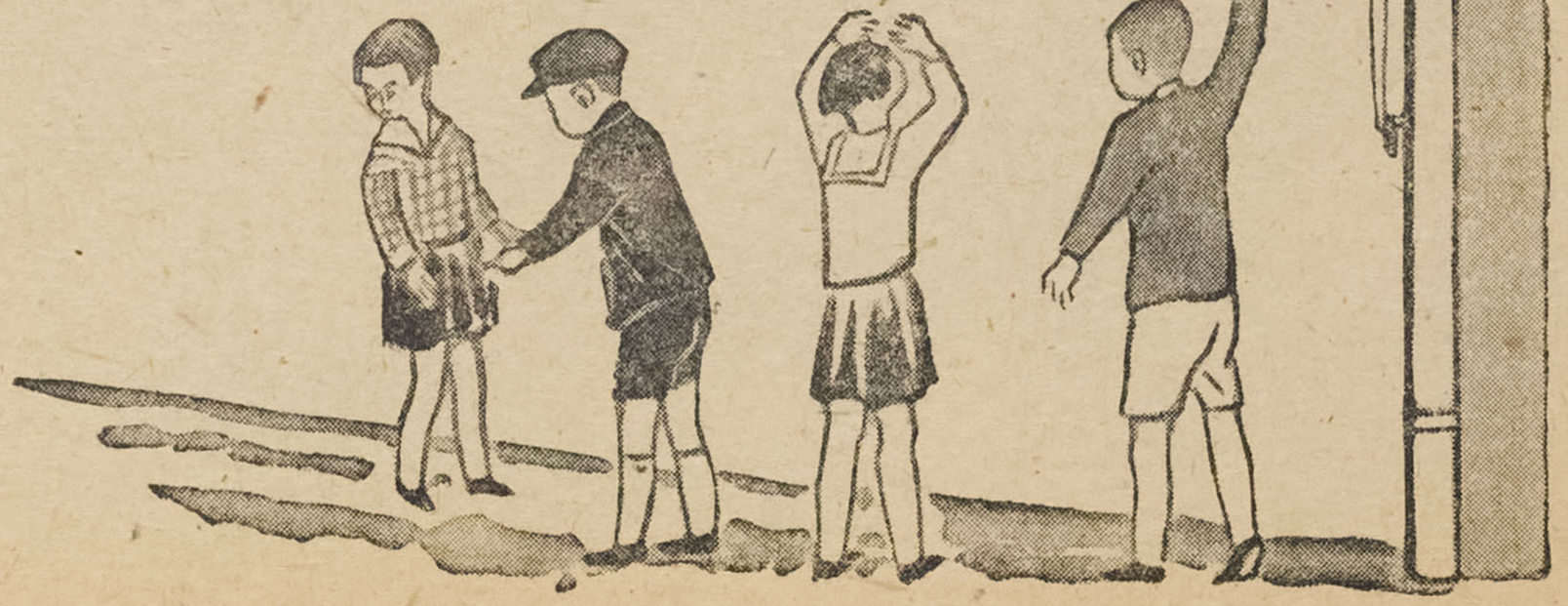
勇「さあ、十四メートルぐらゐあかな。」

正男「ぼくは、十三メートルないと思ふ。」

勇「春枝さんは、どのくらゐかしら。」

春枝「さうね。十メートルぐらゐかしら。」





花子「みんな、ここで何をしてゐるのですか。」

花子「みんな。ここで何をしてゐるのですか。」

春枝「あの國旗揭揚臺の高さを、あててゐるのです。」

花子さんも、旗竿の先を見あげる。

春枝「花子さんは、どのくらゐと思ひますか。」

花子「十一メートルはあると思ひます。」

春枝「あら、みんなちがひますね。だれが、いちばん正しいでせう。」

正男「何とかして、きちんと高さを計れないものかな。」

二

それから、三日ばかりたつたある日、正男さんが、自分のかげ

を見ながら考へこんでゐる。

正男「けさは、ぼくのかげが、ずつと長くのびてゐたのに、今見ると、こんなに短くなつてゐる。ぼくのせいの高さに變りはないのに、かげだけが、あんなにのびたりちぢんだりするのだな。」

正男さんは、あちらこちらと歩きながら考へる。しばらくして、

正男「待てよ、かげがのびたりちぢんだりしてゐる間に、ぼくのせいの高さと同じ長さになる時が、あるにちがひない。」

歩くのをやめて、立ち止る。急に思ひついたらしく、手を

正男「さうつて、
かうすればいいんだ。いさうだ、さうだ。かうすればいいんだ。」
さもうれしさうに、にこにこする。

三

勇「正男くん、わかつたつて、ほんたうにわかつたのか。」
正男「わかつた。」
春枝「どうすればいいのか。」
正男「まづ、ぼくのかげを計るのです。」

歩くのをやめて、立ち止る。急に思ひついたらしく、手を

花子「かげを。」

正男「さう。」

勇「きみのかかげを計るんぢやないよ。あの國旗掲揚臺の高さを計るんだよ。」

正男「まあ、待ちたまへ。かういふわけなんだ。正男さんは、巻尺を勇さんに手渡して、これで、ぼくのかかげの長さを計つてくれたまへ。」

勇さんたちは、正男さんのかかげを計る。

勇「百二十八センチあるよ。」

花子「正男さんのかかげを計つてから、どうしますの。」

正男「今、ぼくのかかげが、百二十八センチあるでせう。ところ

正男「今、ぼくのかげが、百二十八センチあるでせう。ところが、ぼくのせいの高さは、百二十四センチなんです。あのせいと同じ長さになりますか。」

勇「わかつた、やつとわかつた。」

春枝「どうなるのですか。」

勇「正男くんのせいと、かげの長さと同じになつた時刻は、あの國旗掲揚臺の高さと、かげの長さが同じになるのですか。」

正男「さう、さう。」

勇「いふわけだらう。」

花子「正男さんのかげを計つてから、どうしますの。」

春枝「それで、その時刻に、あの國旗掲揚臺のかげの長さを計るのですね。」

正男「そのとほりです。」

勇「うまいところに氣がついたな。」

花子「ほんたうですね。」

四

正男「さ、勇くん、ぼくが『ようし。』といつたら、國旗掲揚臺のかげの端に、しるしをつけてくれたまへ。」

勇さんは、國旗掲揚臺のかげのところへ行つて、しるしをつける用意をする。

春枝さんと、花子さんは、ぼくのかげが百二十四センチ

春枝さんは、國旗掲揚臺のかげのところへ行つて、しるしをつけるために用意をする。

春枝「今、百二十四センチになりました。」

花子「二人は、巻尺を張つて見つめてゐる。まもなく、

正男さんは、「ようし。」と叫ぶ。勇さんはしるしをつける。

勇「さ、みんなで、いつしよに計つてみよう。」

みんな「一メートル、二メートル、三メートル。」

勇「ちやうど十二メートル。」

数へる。

みんな「十メートル、十一メートル、十二メートル。」

みんな「あれが十二メートルの高さかな。」

といつて、國旗揭揚臺の先を見あげる。

十五　夏

じりじりと。

照りつける太陽。

ごみつぽいでこぼこの道を、

トラックが通る。

「カーン、カーン、カーン、カーン。」

「カーン、カーン、カーン、カーン、カーン、カーン、カーン、カーン、カーン、カーン。」

けたたましい響きだ、

鐵工場の前。

その庭に、日まはりが咲いてゐる。

くろぐろと、

茂つた夏草。　木立には、

蟬（せみ）が、

油を煮るやうに鳴きたてゐる。

びつしよりと、
軍服を汗ににじませて、
兵隊さんが通る、
一中隊ばかり。

「暑いなあ」。

だれもがさういふ。しかし、
夏ほど明かるくて、
さかんなものはあるまい。

十六　兵營だより

十六　兵營だより

武男くん、お手紙ありがたう。

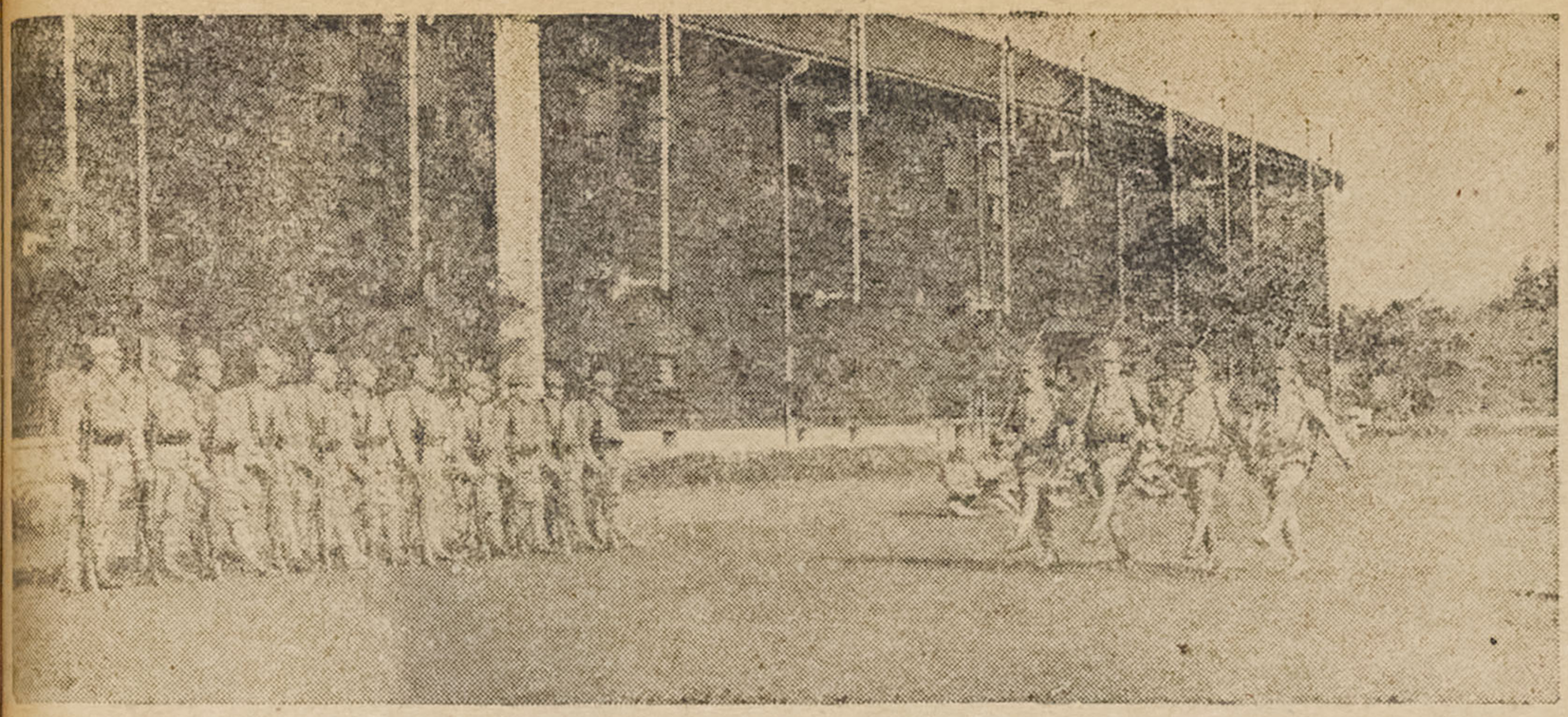
ら來た手紙を渡された時は、ほんたうにうれしく思ひました。

班長殿に呼ばれて、きみから

をぢさんや、をばさんも、お變りないさうで、何よりです。

ぼくも、入營以來ずつと元氣です。　このごろは、もうすつかり兵營生活になれて、毎日樂しい日を送つてゐます。

朝、起床ラッパが鳴ると、いつせいにはね起きます。　すばやく寢床をかたづけて、かわいた手拭で、からだが赤くなる



ほどこすりまます。それから、兵舍の前に並んで、點呼を受けるのです。點呼がすむと、きれいな朝の空氣を胸いつぱい吸つて、「一、二、三、四。」と、掛聲勇ましく體操をしますが、その時は、何ともいへないよい氣持です。

教練は、午前と午後にあります。「氣をつけ。」の姿勢をきちんとしたり、大きな目を見はつて、くわつぱつに手をあげて敬禮をしたり、背嚢（はいなう）と銃を肩に、步調を合はせて勇ましく行進したり、「をりしけ。」や、「ふせ。」の姿

勢で、小銃を擊つけいこをしたりします。

勢で、小銃を擊つけいこをしたりします。

時には、朝早くから、遠く、へ演習に出かけることもあります。斥候（せきこう）になつて森や林の中をかけまはつたり、「パンパン、パンパン。」と、小銃や機關銃を擊つたり、相手の陣地に、「わあつ。」と大聲をあげて、はげしく突擊したりします。

野原や山を一日中かけまはつて、夕方おなかをぺこぺこにして、なつかしい兵營へ歸つて來るのです。すぐに兵器の手入れをして、夕飯をたべますが、そのおいしいことは、またかくべつです。大きなアルミニユームの食器に、山もりにした御飯を、見るまに平げてしまひます。

夕食後は、ぼくらの最も樂しい時間で、お風呂へはいつたり、軍歌の練習をしたり、お汁粉や、大福餅をたべながら、お國じまんの話に花を咲かせたりします。

午後八時には、夜の點呼があるので、めいめいの部屋で整列して、週番士官殿の來られるのを待ちます。週番士官殿が見えると、班長殿は、

「第一班、總員三十名。事故なし。」

と、人員の報告をされます。ぼくたちは、「今日も、おかげで無事に終りました。」といはれます。それから、ぼくたちに向かつて、

「番號。」

といはれます。ぼくたちは、「一、二、三、四、五、六。」と、大きな聲で、次々に

した。」といふ心持で、「一、二、三、四、五、六。」と、大きな聲で、次々に

した。」といふ心持で、「一、二、三、四、五、六。」と、大きな聲で、番號を送つて行きます。

點呼が終ると、みんな聲をそろへて、おごそかな氣持で、軍人勅諭（ちよくゆ）を奉讀します。

靜かな夜の兵營のどの室からも、力強い奉讀の聲が聞えて來るのは、この時です。

勅諭の奉讀がすむと、班長殿から、いろいろな命令や注意などを受けます。

九時には、「みんなおやすみなさい。」と、消燈ラッパが鳴り渡るので、その前に、日



「番號」

といはれます。ぼくたちは、「今日も、おかげで無事に終りま

記をつけたり、手紙を書いたりします。

ぼくらが、朝夕寢起きする室の壁ぎはには、銃を立て掛けておくところがあつて、手入れのよくとどいた小銃が、行儀よく並んでゐます。　兩側には寢臺があつて、寢臺の後には、めいめいの持物を置くたながあります。　その上に、ていねいにたたんだ軍服や、背嚢などが、きちんと置いてあります。

室のすみからすみまで、よくせいとんがしてあります。

いざといふ場合には、暗がりでも、すぐ武裝することができます。

晝のつかれで、みんなすやすやと眠つてゐると、夜中に、

「武裝して、兵舍の前に集れ。」

「武裝して、兵舍の前に集れ。」

と、急に命令がくだることがあります。

武裝して、まつ暗な兵舍の前に整列します。

入營當初は、寒い風が吹きまくる營庭で、教練をしたり、つめたい水で食器を洗つたり、せんたくしたりなどが、だんだんなれてくると、日々の仕事がおもしろく、ゆくわいになります。

兵營は、いはば一つの大きな家庭で、中隊長殿を始め、上官のかたがたは、ぼくらを、自分の弟か子のやうにしんせつにしてくださいます。それで、みんなは仲よくはげましあつ

ます。

晝のつかれで、みんなすやすやと眠つてゐると、夜中に、

て、毎日、教練をしたり勉強したりして、軍人としてのりつぱな精神を養つて行くのです。

武男くんもいよいよ兵營生活をするやうになるのですから、今のうちから、しつかりやるやうにしてください。

手紙を書いてゐる間に、いつのまにか九時前になりました。ぢき消燈ラッパが鳴りますから、これでやめます。みなさんによろしく。さやうなら。

年　月　日

武男くん

新一

十七　油蟬（あぶらぜみ）の一生

油蟬の子は、土の中に住んでゐます。

ら、げらや、もぐらのやうに、土の中を上手にもぐつて行きます。

す。　たいていは、木の細い根をちくにして、まるい穴をほり、

その中には、木の細い根を木の根にさしこんで、汁を

の口には、針のやうな管があります。

ら、その管を木の根にさしこんで、汁を

吸つて生きてゐます。

それにしても、この油蟬の子は、いつ、



どこで生まれたのでせうか。

夏の末になると、親蟬は、木の皮にきずをつけて、その中に卵を生みます。　卵は、そのままで冬を越して、あくる年の夏かへるのですが、その時は、二ことりぐらみの小さな、白いうじのやうなものです。　この小さな虫が、やがて木をおりて、いつのまにか、柔かい土の中にもぐりこんでしまひます。

最初は、淺いところにゐますが、年を取るにつれて、だんだん深いところへはいつて行きます。　からだも大きくなり、形も色も、しだいに變つて、丈夫さうになります。

土の中へ地下の生活が終るのです。　そこで、油蟬の子は、深いところから、だんだ

が終るのです。　そこで、油蟬の子は、深いところから、だんだん淺いところへ移つて、地上へ出る日の來るのを待つてゐます。

天氣のよい夏の夕方、油蟬の子は穴から地上へはひ出します。もう鳥などはたいてい寢てゐますが、それでも油蟬の子は用心して、急いで安全な場所をさがします。木とか、草とかにのぼつて、安心だと思ふと、前足のつめで、しつかりとそれにしがみつきます。すると、ふしぎにも、前足は堅くその場所にくつついて、動かなくなります。

そのうちに、堅いせなかの皮が縱に割れて、中からみづみ



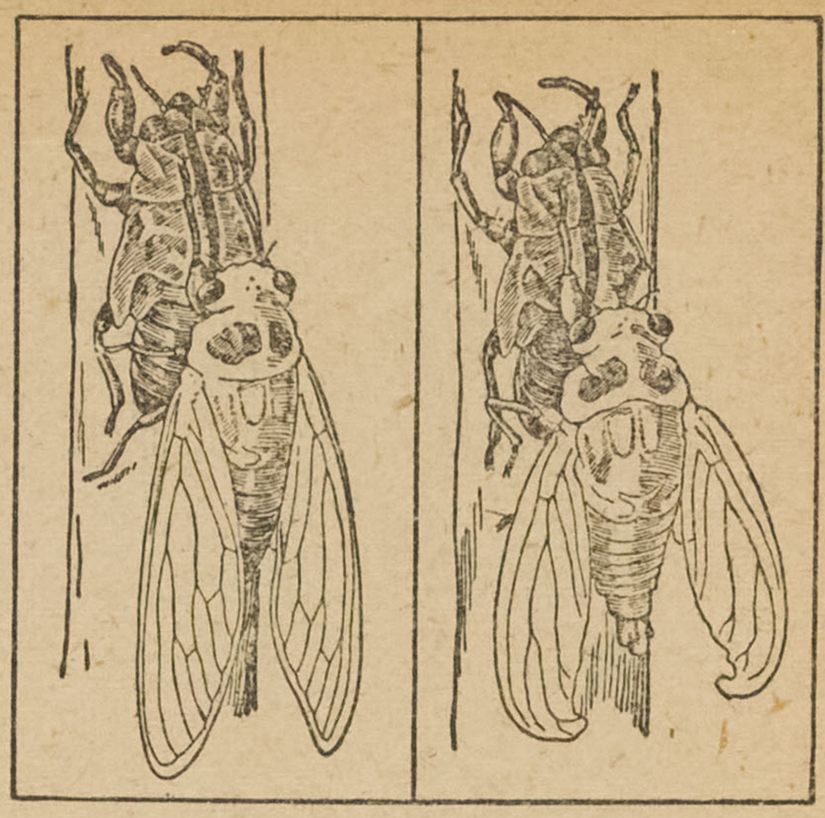




うしいからだが現れます。　すぐにせなかが出る。頭が出る。つついて足が出て来ます。もう殘つたところは、腹の下の方だけです。

そこで、おもしろい運動を始めます。ぐつとそりかへるやうにして、頭を後へさげます。しばらくは、そのままで、じつと動かないでゐますが、やがて起き直つたと思ふと、からだは完全に抜け出します。しわくちやになつてゐた羽が、みるみる延びて來ます。

もう、蟬の子ではありません。　色はま



もう、蟬のやうな子ではありません。

だ青白くて、弱々しさうですが、形はりつぱな親蟬です。

夜風に當り、朝日に當ると、すつかり色が變つて、見るからに丈夫さうな油蟬に

なります。さうして、天氣のよい夏の日を、樂しさうに飛び

まはり、鳴きたてます。

油蟬は、それから二三週間生きてゐます。滿六年といふ

長い地下生活にくらべて、なんといふ短い地上の命でせう。

ところで、この六年でさへ長いと思はれるのに、外國には、十

何年も、土の中にもぐつてゐる蟬があるといふことです。

十八　とびこみ臺

「向かふの臺の中段へあがつて、そこから、二人ともとびこみ臺へ、泳いで行かう。」

といつて、本田くんといつしよに、肩を並べて泳いで行きました。

とびこみ臺の中段へあがつて、そこから、二人ともとびこみました。

みの練習をしましたが、本田くんの方が上手でした。

上のいちばん高い段からは、五年生の山本くんがとんでみました。

からだをぴんとのばして、臺の上から、まつさかさまに、水の中へずぶりとはいつて行くのは、いかにも愉快

さまに、水の中へずぶりとはいつて行くのは、いかにも愉快さうでした。

「わたなべくん、上の段からとばうよ」。

と、本田くんがいひましたので、いちばん上の段へのぼつて行きました。とばうと思つて下を見ると、何だかこはいやうな氣持がしました。

頭の上では、夏の太陽が、かんかんと照つてゐます。青い波はきらきらと光つて、目が痛いやうです。

「おい、早くとびたまへ。きみがとばなければ、ぼくがとべないぢやないか。」

と、本田くんがいひました。

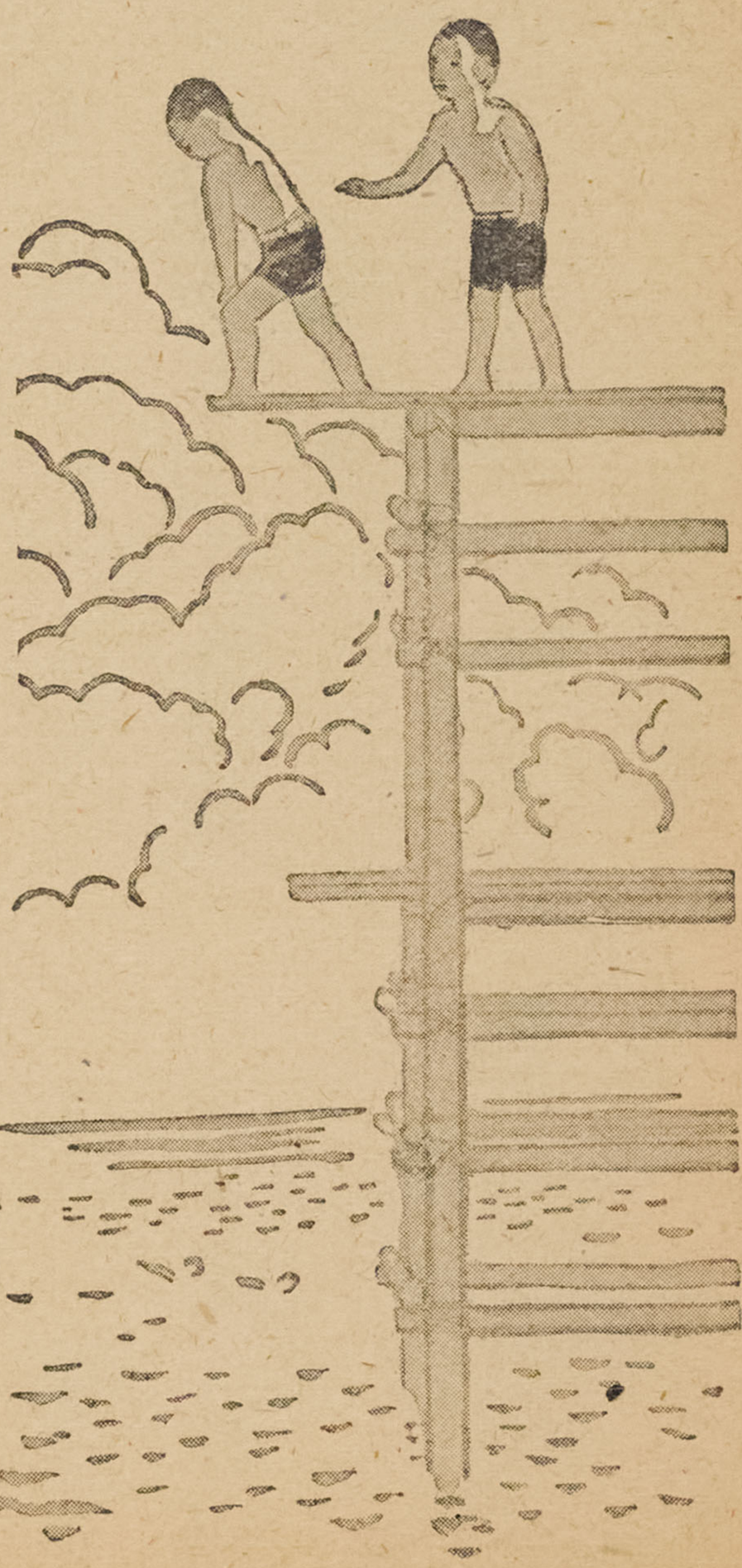
「よし。」

といつて、ちよつと下を見ると、足がぴつたり板について、離れないやうな氣がしました。

空では、大きな入道雲が笑つてゐます。

「弱虫、早くとびたまへ。」

と、山本くんがいつたので、今度は、下を見ないで、向かふの山をじつと見つめました。



をじつと見つめました。

「えいつ。」

といひながら、思ひきつて、兩足で臺をけりました。

「あつ。」

と思つたその時、空と水がひつくり返つて、からだはもう水の中へもぐつてゐました。

水の上へ顏を出すと、本田くんと山本くんが、臺の上で笑つてゐました。

「おういぼくのとび方は、どうだつたい。」

と聞きますと、二人は、

弱虫早くとびたまへ」

と、山本くんがいつたので、今度は、下を見ないで、向かふの山

「よかつたよかつた。うまかつたよ。」

とほめてくれました。

ぼくは、とびこみ臺の方へ泳いで行きました。

十九　母馬子馬



母馬子馬
沼(ぬま)の岸、
夏のゆふべの柳かげ。

母が番して、
子の馬は、
ゆつくりゆつくり水を飲まむ。

まるくひろがる
水の輪が、

いくつも出ては消えるたび、
水にうつつた
三日月が、
ゆらゆら見えたりかくれたり。

母馬子馬、
沼の岸、
柳のかげが暮れて行く。

二十　東郷元帥（とうがうげんすゐ）

二十　東郷元帥

關東大震災の時であつた。

「ドドツ。」と、ものすごい地響きとともに、東京の何十萬の家は、一度に震動した。瓦が落ちる、窓ガラスが飛ぶ、石垣がくづれる。傾く家、めちやにつぶれる家もずゐぶん多かつた。

市民は、まつたく生きた氣持もなかつた。命からがら逃げ出した者も、しばらくは、つづいて起る餘震におどろいて、ただ「あれよ、あれよ。」といふばかり。

ましてけが

や、つぶれた家の下敷きになつた者は、どんな氣持であつたらう。

東郷元帥の家は、質素な、古い木造建であつた。

震動に、この家も、たちまち壁はくづれ、屋根瓦はたいてい落ちてしまつた。

ちやうど、お晝の食事中であつた元帥は、家の人々といつしよに庭へ出たが、はげしい震動がひとまづ過ぎると、すぐに居間へとつて返した。たんすをあけて、みづから軍服を取り出し、手早く着かへた。

勳章をつけた。

「どうなさるのでございますか。」

「どうなさるのでございますか」。

といふ家人の問に對して、元帥はおごそかに、

「赤坂離宮へ」。

と答へた。

ひきつづき起る餘震に、家は震ひ、地はゆれ、市民があわてふためいてゐる中を、七十七歳の老元帥は、赤坂離宮へと急いだ。

當時、大正天皇は、日光にいらせられた。　元帥は、赤坂離宮に、攝政殿下をお見まひ申しあげたのである。

攝政殿下の御無事でいらつしやるのを拜した元帥は、胸

取り出し手早く着かへた。さうして胸に勳章をつけた。

をなでおろしながら、三時ごろおいとまを申しあげて、自宅へ歸つた。

そのころ、東京市中は、いたるところに火災が起つてゐた。

歸るとすぐ、元帥は家の人に、

「陛下のお寫眞を、庭へお移し申せ」。

と命じた。

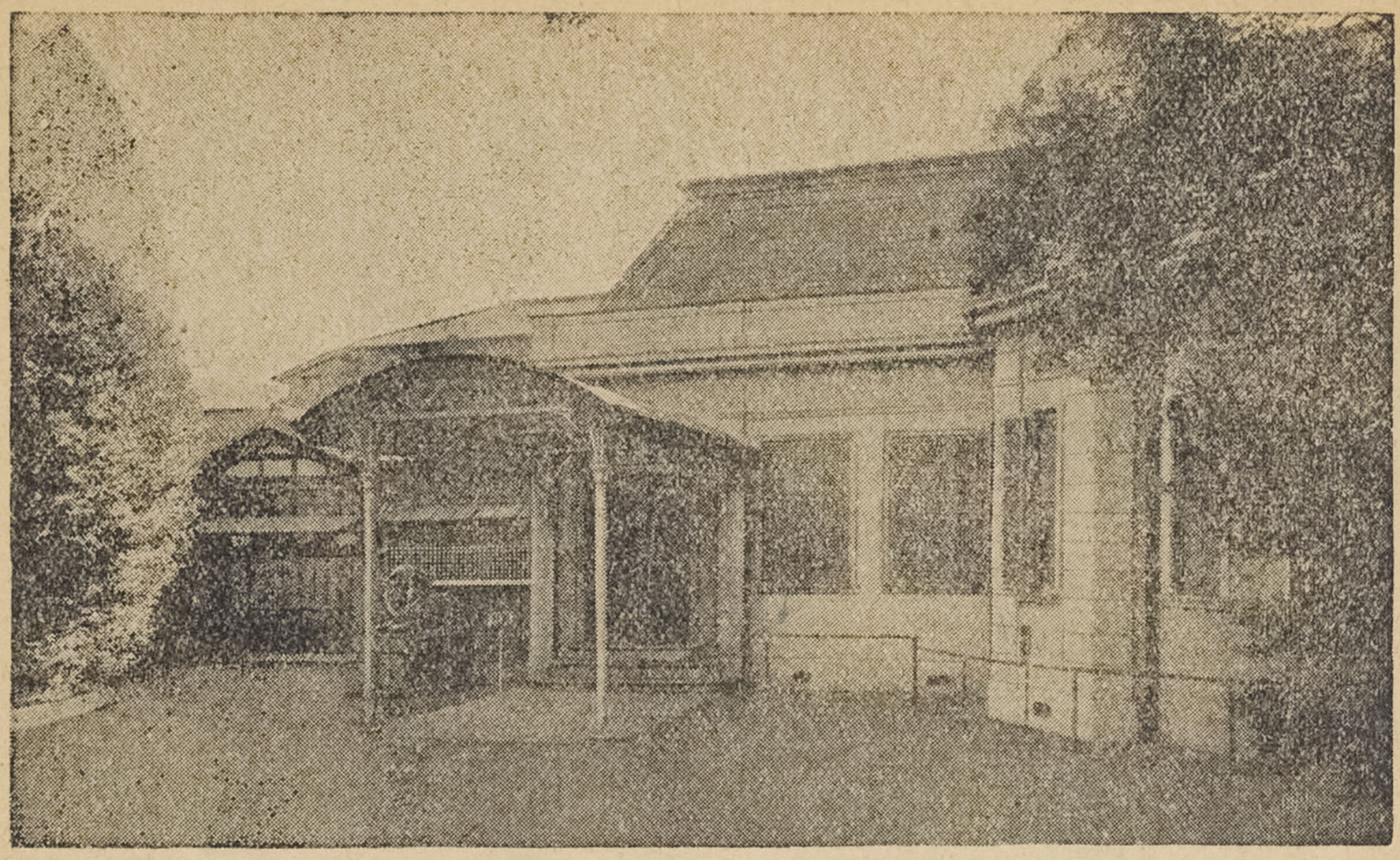
お寫眞は、庭の中央に安置された。

やがて、火は近くの家に起つた。元帥の家の人々は、手傳ひに、その方へかけつけて行つた。

ところが、火はたちまち元帥の家をおそつた。百



車小屋が見るまに燒けた。



車小屋が見るまに焼けた。

元帥は、家に残つてゐた人々を指圖しながら、みづから防火につとめた。

「あぶなうございます。どうぞ、お出ましください。」

たちのきください。」

と、人々がすすめても、元帥は、

「なに、大丈夫。もう少し。」

といつて、聞き入れなかつた。自分の家を焼くのは、近所の家々へ、めい

ひにそのうつかへにいつて行つた。

ところが、火はたちまち元帥の家をおそつた。

まづ、自動

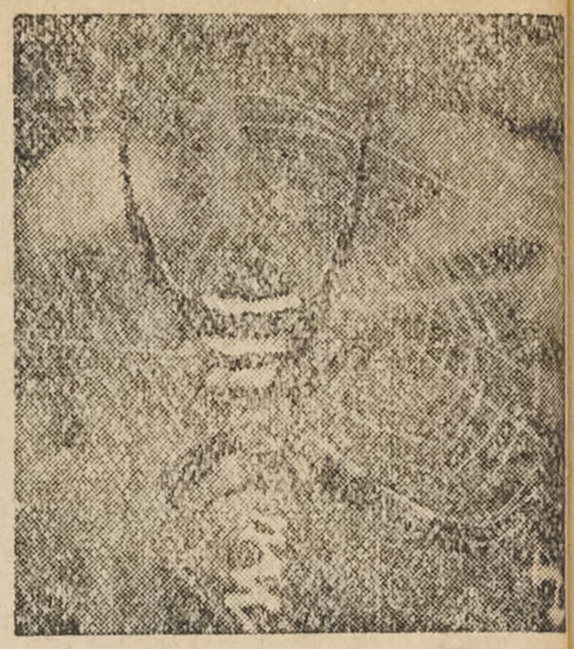
わくをかけることになる。　守らなければならないといふのが、元帥の心であつた。

火は前後二回おそつたが、元帥の指圖と、集つてきた人々の働きによつて、消しとめられた。　かうして、家は最後まで無事であつた。

二十一　くものす

二階の窓から見てゐると、大きなくもが一匹、すこしの目の前へぶらさがつて來ました。　私は、びつくりしました。

見ると、くもは、雨どひのところから、糸を引



見ると、くもは、雨どひのところから、糸を引いておりて来たのです。さうして、そのまま、じつとして動かうともしません。これから、何をしようとするのかと思ふと、私は、急におもしろくなつて来ました。

くもは、やがて後の方の足を動かして、おしりのところから、たくさんの細い糸を引き出し始めました。糸は、一センチ、二センチと、見るまに延びて、二メートルぐらゐになりました。糸は、一本とも知れない細い、白い糸が、ダリヤ風にゆられながら、ふはふはと空中にただよつてゐるのは、ほんたうにき

れいでした。

そのうちに、このたくさんの糸の中の一本が、向かふの柿の木の枝にくつついきました。くもには、それがすぐわかるものとみえて、しきりにこの糸を、引つぱつたり動かしたりしてゐましたが、やがてそれを傳つて、向かふへ渡り始めました。くもは、ほつと一安心したやうで、風にゆられながら、やつと柿の木にたどり着きました。



した。

今度は、前の方の足をしきりに動かして、この糸を自分の方へたぐりよせ始めました。すると、今までたるんでゐた糸が、だんだんまつ直になりました。かうして、雨どひと柿の木との間に、一筋の糸が、空中にぴんと張り渡されました。

くもは、この上を、いそがしさうに行つたり来たりして、すきを作る仕事をつづけました。

私は、くものりかうなのに、すつかり感心してしまひました。

晩になつて、また行つて見ますと、そこには、もうりつぱな網ができてゐました。

二十二　夕日

赤い大きな夕日が、今、西の遠いところです。

焼けきつた鐵のやうにまつかです。　たゞひほどに見える大きな圓の中には、何かとろと、とけた物が動いてゐるやうに見えます。

地上のみどりのあざやかなこと、美しいこと。　遠くの木立や、家や、煙突が、くつきりとタ空に浮き出してゐます。

日は、ぐんぐんと落ちて行きます。　一センチ、二センチと

刻んで行く

の下の端よ、地平線こかりはつきりと見えます。　もう、圓

立や、家や、煙突が、くつきりと夕空に浮き出し
日は、ぐんぐんと落ちて行きます。一センチ、二センチと
刻んで行くやうに、動くのがはつきりと見えます。
の下の端は、地平線にかかりました。
ずんずん、沈んで行きます。
圓は、しだいに半圓となりました。
あ、とうとう沈んでしまひました。　櫛ほどになりました。
日が落ちたあとの空は、なんといふ美しさでせう。　今、日
が沈んだばかりのところから、さし出たいく百筋のこまか
い金の矢が、夕空を染めて、空は赤から金に、金からうす青に、
ぼかしあげたやうです。
あちらこちらに、眞綿を引き延したやうな雲が、金色に、く

れなゐに、色づき始めます。
美しい空です。　はなやかな空です。

二十三　秋の空

どこまでも
高い空だ。
煙突やアンテナが、
せいのびをしてゐる。
どこまでも
青い空だ。
電柱の碍子（がいし）が、

どこまでも
青い空だ。
電柱の碍子が、
くつきりと白い。

どこまでも
さえた空だ。
たたけば、かんかん
音のする空だ。

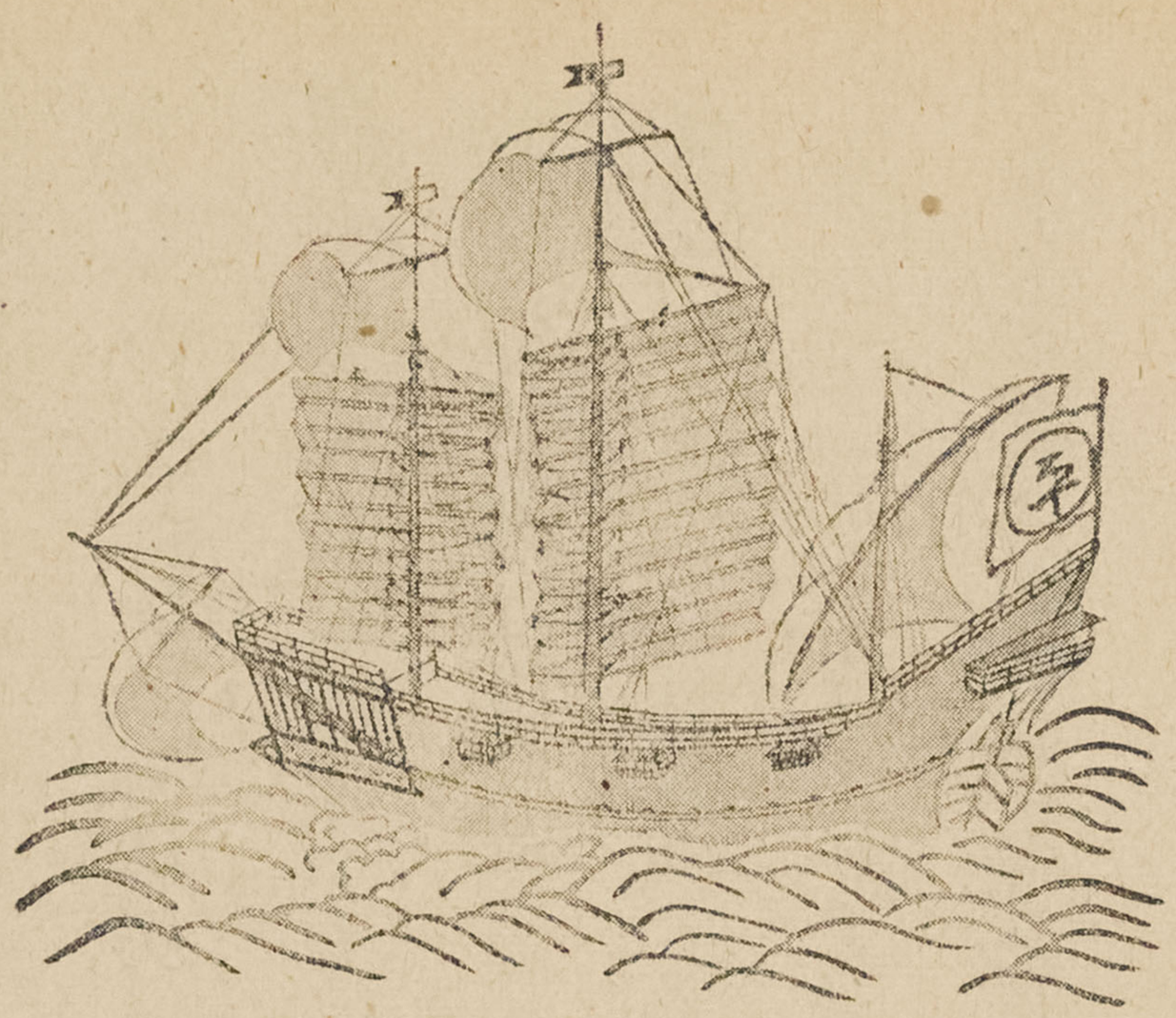
二十四

濱田彌兵衛

末次船の船長濱田彌兵衛は、臺灣のオランダの長官ノイツの不法な仕打に、腹が立つて腹が立つて、たまりませんでした。

臺灣は、明治以來日本の領土になりましたが、今から三百二十年ぐらゐ前までは、まだどこの國のものともきまつてゐませんでした。今日、高砂族といつてゐる島の人が、未開の生活をしてゐるだけであります。

その以前から、日本人は、さかんに南方へ船で出かけ、南洋印や、タイや、ジヤワ・スマトラあたりまで進出して、貿易をしてゐました。したがつて、その途中にある臺灣へも、早くから往來して、そこで島の人や、南



ところで、そのころ、ひよつこりと臺灣へ現れたのが、オラ

途中にある臺灣へも、早くから往來して、そこで進出して、貿易をしてみました。

那から、今のフィリピンや、佛印やタイや、ジヤワ・スマトラあ

支那本人も、たくさんありました。

そこから來る船と貿易をしたり、

りして、

る日

濱田彌兵衛は、長崎の貿易商末

次平藏の船の船長として、いつも

臺灣から南支那へ通つてゐまし

た。

ンダ人です。　かれらは、兵力を以つて臺灣の港を占領し、そこに城を築きまして、日本船や支那船が、貿易するのをさまたげるために、一割といふ高い關稅を拂ふことを命じました。　さうして、日本人は、なかなか承知しませんでした。

いはば、新參者のオランダ人が、古參の日本人をおじやまあつかひにしたのです。　日本人は、なかなか承知しませんでした。　そこで、オランダの長官は、たびたび日本船を取り調べたり荷物を沒收したりしてさんざんいやがらせをしました。

彌兵衛が、末次船二さうを仕立て、荷物や武器を積んで、臺灣に着いた時、オランダの長官ノイツは、すぐ役人に命じて

灣に着いた時、オランダの長官ノイツは、すぐ役人に命じて、荷物や武器を積んで、臺
その船を調べさせ、一時、彌兵衛を一室にとぢこめておいて、
武器や船具を没収させてしまひました。彌兵衛が腹を立
てたのは、それがためであります。
しかし、彌兵衛は、なにもオランダ人と、けんくわをしよう
といふのではありませんから、できるだけおだやかに出て、
武器や船具を返してくれるやうに、たびたびかけ合ひまし
た。ノイツは、
「何のために、武器を積んで來たのか。」
と彌兵衛を責めます。

「海賊にそなへるためです。」

と、彌兵衛は答へました。　そのころ、南支那の海上に海賊の一團がゐて、彌兵衛も、これまでずゐぶん苦しんだことがあります。しかしノイツは、

「もうこのへんに、海賊はゐないはずだ。」

としらばくれて、武器を返さうといひません。かういふかけ合ひをしてゐる間に、むなしく二月日が過ぎて行きました。ノイツは、武器や船具を返さないばかりか、日本船に水さへもくれませんで、高い椅子にふんぞり返りながら、足をもうぶるわうへ

一つの椅子の背にのせたまで、彌兵衛に面會したことも

日本船に水さへもくれません
ぶるわうへいで、高い椅子にふんぞり返りながら、足をもう
一つの椅子の背にのせたままで、彌兵衛に面會したことも
ありました。オランダ人の足が、日本人の頭の上にあると
いふことが、どれほど彌兵衛たちを怒らせたかわかりませ
ん。

彌兵衛は、もうこの上がまんして、日本の恥を臺灣にさら
したくありませんでした。何とかして、日本へ歸りたいと
思ひましたら、むしろオランダ人と戰つて、死んだ方がましだとさへ思ひました。

もし歸れないなら、むしろオランダ人と戰つて、死んだ方がましだとさへ思ひました。

彌兵衛は、部下の者といつしよに、ノイツに最後の面會を求めました。

その時、ノイツは城外の別館にゐましたが、通

譯や、そのほか數人の者がそばにゐました。

彌兵衛は、まづおだやかに申し出ました。

「私どもは、日本へ歸らうと思ひますから、ぜひ、出航を許可していただきたうございます。」

ノイツは、だまつてゐました。

「それで、このさい、船具や武器のお引き渡しを願ひたいと思ひます。」

ノイツは、まだ返事をしません。

「風の都合もありますし、どうするとノイツは、

「歸ることは許さん。」

「歸ることは許さん。」

と、いつものやうにわうへいに答へました。

どうしても許さないといはれるなら、今日は覺悟があります。」

ますぞ。」

と、彌兵衛は、少しつめ寄つていひました。

このやうすを見て、そばにゐたオランダ人たちがびつくりしました。

ノイツも、氣味わるく思つたやうですが、わざと平氣な顏で、

「そんなに歸りたければ、歸れ。」

と吐きだすやうにいつたあとで、

「だが、荷物は全部置いて行くのだぞ。」

とつけ加へました。

彌兵衛は、じつとノイツを見つめました。もう、がまんも何もあつたものではないと思ひました。

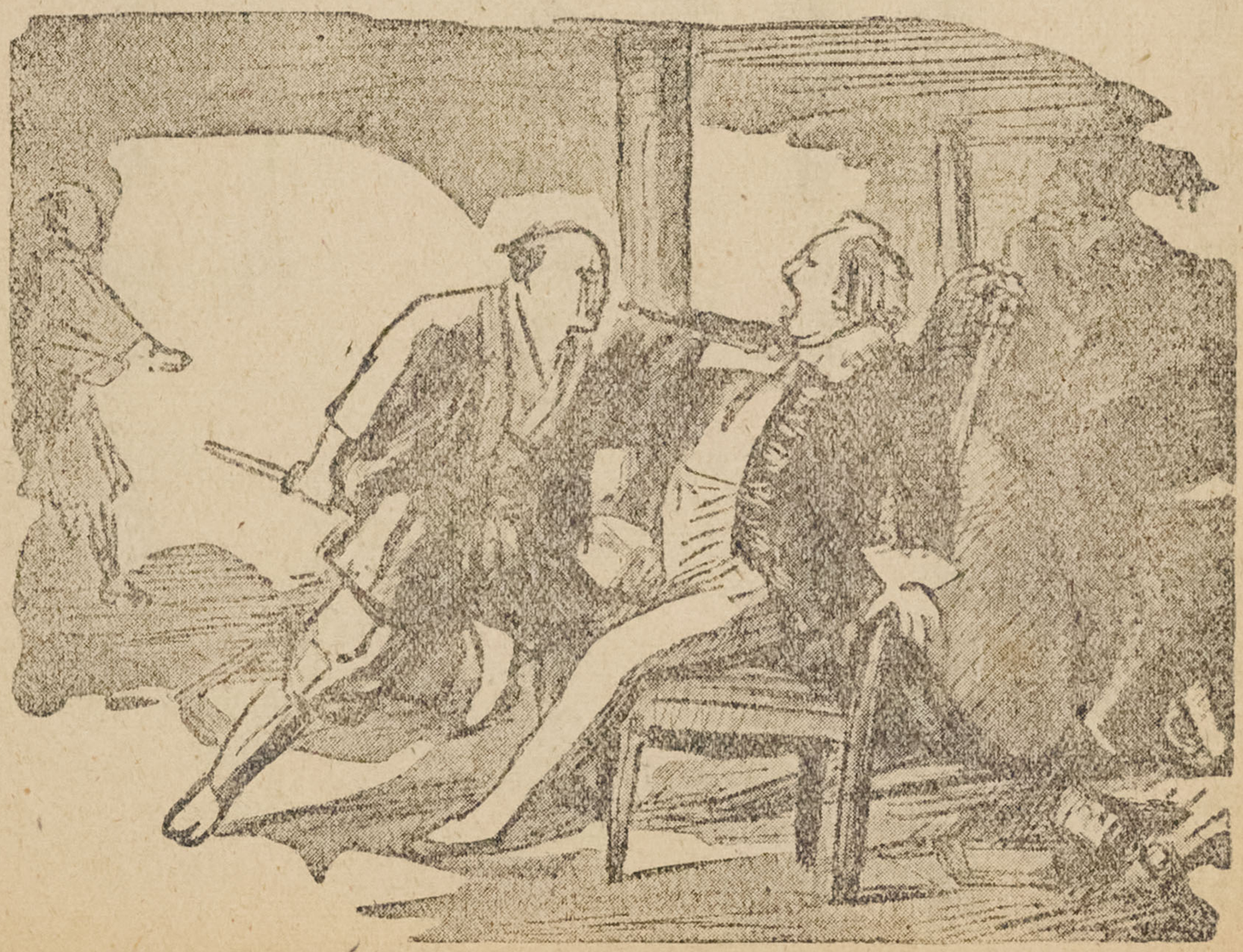
「よし。」

と叫ぶが早いか、すばやくノイツに組みつきました。

彌兵衛は、かた手にノイツの胸ぐらをつかんで引きすゑ、かた手に短刀を抜いて、その胸に突きつけました。

彌兵衛の部下も、刀を抜きました。

その室にゐたオランダ人が、
逃げ出して急を知らせました。
たちまち、城内にラッパが鳴り響きました。オランダ兵士が、彈をこめた銃を持つてかけつけて來ました。
「ドドン、ドドン」。
兵士たちは、屋内へ向かつて撃ちこみました。
彌兵衛は、ノイツの首に刀を



突きつけたまま。

「撃つなら撃て。その代り、長官の命はないぞ。」

といつて、きつとあたりをにらみました。

「いや、撃つな。撃つなといふに。」

目を白黒させながら、ノイツはかけつけて來たオランダ人にいひました。

兵士は、仕方なく撃つことをやめました。

それから彌兵衛は、ノイツをしばりあげたままで、長い間だんぱんをつづけました。

とうとうノイツは、これまでたびたび沒收してゐた荷物や、武器、船具、そのほかすべての物を返すことを約束しまし

や、武器。船具、そのほかすべての物を返すことを約束しました。

数日のののち、彌兵衛を船長とする二さうの日本船は、受け取つた荷物をいつぱい積み、おまけにオランダ船一さうを引きつれて、堂々と臺灣の港を出航しました。

「ヤヒョーエドノ」といふ名が、そののち、オランダ人の間に響き渡りました。

商(111) 民(97) 柔(86) 整(80) 怒(64) 坂(57) 越(47) 講(39) 傷(25) 汝(17) 潮(4)

占(112) 質(98) 縦(87) 總(80) 叫(64) 汲(58) 輪(49) 式(40) 術(25) 討(17) 銀(4)

税(112) 素(98) 割(87) 故(80) 計(67) 餘(59) 歯(50) 鍬(43) 當(25) 勅(17) 狩(6)

具(113) 對(99) 直(88) 報(80) 變(68) 幅(60) 航(51) 等(43) 櫻(30) 失(17) 調(7)

責(113) 老(99) 完(88) 告(80) 刻(71) 尺(60) 景(52) 科(43) 遺(31) 絶(18) 拂(8)

背(115) 宅(100) 愉(91) 奉(81) 端(72) 危(60) 振(53) 全(43) 族(31) 祈(19) 標(10)

恥(115) 央(100) 快(91) 燈(81) 響(75) 油(61) 妙(54) 現(45) 配(33) 任(19) 廷(14)

求(115) 圓(106) 離(92) 壁(82) 煮(75) 注(61) 造(55) 賊(45) 寢(33) 特(19) 従(14)

可(116) 法(110) 柳(95) 精(84) 活(77) 錦(61) 堤(56) 圍(45) 湯(34) 丈(20) 祝(14)

吐 領 暮(96) 養(84) 拭(77) 伐(62) 市(56) 覺(45) 照(36) 震(23) 座(15)

災(97) 管(85) 練(78) 探(62) 街(56) 悟(45) 泥(37) 麻(23) 奥(15)

往(111) 垣(97) 末(86) 敬(78) 筋(64) 附(57) 低(47) 耕(37) 固(24) 給(16)

昭和十七年二月十七日
文部省檢查濟



著作權所有

昭和十七年二月十四日印刷
昭和十七年二月十六日發行
昭和十七年二月十六日翻刻印刷
昭和十七年三月三十一日翻刻發行

初等科國語三 第四

(新)定價金拾九錢

著作兼發行者 文部省

翻刻印刷發行者 大阪市西成區津守町五百九十六番地ノ四
代表者 中井利正

印刷所 大阪市西成區津守町五百九十六番地ノ四
大阪書籍株式會社工場

發行所 大阪書籍株式會社

国立国語研究所
1002363156

0.0
24
3
63156